ヨ3X6

31-345

文學博士姉崎正治編

美の宗教

東京　博文館藏版

明治
40 5 28
交内

序言

この書は緒言にもいつた如く、E.P.B.君の書簡を集めたもの。歳月の多くは病床に横臥して病魔と闘つてをる身で、而かも美の神の信仰に安立し、平和と和樂とに加へて、光明ある永遠の希望を抱いて撓まない友の心をこめた筆の跡を、我が同胞に紹介するのは自分にとつて何よりも喜ばしい事。その惠みを美の神に感謝せざるを得ない。

E.P.B.君の信仰の内容は、云ふまでもなく、この書中に現はれて十分に盡してをる。之に對して送つたこちらの書簡も數多いが、それは今一々公にする必要はない。二人の思想の交換の跡は、友の筆で十分盡されてをると信ずる。而して二人の思想は全躰に於て全く傾向を同じうし、理想を共にしてをり、此の書簡は自分の先に著はした「復活の曙光」の趣意を尙一層明白に布衍したものといつて差支ない。然し自分

の信仰ては、この理想を躰得し、實に躬に現はした人物、即ち神人を要求する。これは信仰で、かれは事實。一友の書簡の中に信の内容を發露し得た自分は、その信の事實となり、人間の光りとなつた神人に對する渴仰を述べなければならぬ。此の事業は今後數年の中に世に發表し得らるる事と信ずる。

外篇に收めた數篇は、此の書簡集の趣意に沿うて、その内容を色々の點から宣明しやうとした自分の述作を集めたもので、本文の補遺といつてもよろしい。

此の書を讀むで意見なり批評なりのある讀者は、その論旨を英文で書いて送られたい。自分で適當と見たものはE. P. B. 君に送りたいのである。又その讀者には此の書簡の英文のまゝで印刷したのを一部を進上したい。但し適不適の判斷は全くこちらに委されたい。

此の序言を書いてをる時に、又E. P. B. 君から書簡が來た。今は瑞西

のレーサンの山中で病を養つてこの冬を過ごし、その間には又佛敎以外の宗敎をも自分の見方で批評して見たいとの事。先にこちらからの手紙に、いつ再び此の世で二人が相會し相語り得るかと書いてやつたに對して最後に左の言がある。

It certainly looks as if our paths in life will not cross in bodily forms again in this world, but to make up for it we have the means of exchanging our thoughts and feelings. Our chance to meet otherwise will therefore have to be put off until we are relieved from earth's limitations with all which this implies.

嗚呼自分は何故に心の眞の友を得ては、いつも山海萬里を隔てて、地上の隔りを嘆ぜざるを得ないのか。先には四年前に、身は印度に在つて故國に心友を失つた自分が、今は又故國に居つて、異國の山中に第二の友を忍ばねばならぬ。その友を地上で再び見得るや否や、彼れも我

れも期し難く、又知り得ない。然し吾等二人の間にはその衷心の信と喜びとを交換し交融し得る。眞に面と面と相對して相語り得るのは或は彼の友の言の如くに世の隔りがなくなつた後に待たなければならぬかも知れぬ。此のsudてぬかもsweetな情は實に美の神の賜である。

卅九年十二月廿四日

亡友楊牛第四回の忌辰に

東京にて

姉崎正治

目次

美の宗教……一
緒言……三
一、言語の美、詩……一一
二、藝術は美の創作……二四
三、戯曲……三二
四、音樂……三八
五、人生は精神美を開發する修煉の場……四六
六、愛は美の所生……五四
七、個人から見た美の宗教……六六
八、社會の方面から見た美の宗教(上)……七五
九、社會の方面から見た美の宗教(下)……八五

十、美の宗教と國民的生活……九二
十一、宇宙は美を目的とした意匠……一〇〇
十二、實在と人格の完成……一〇九
十三、微細の物に現はれる美……一二〇
十四、美の神に至るまでの神の諸方面……一二七
十五、神の遍滿含蓄……一三五
十六、父として見た神……一四六
十七、美の神の信仰、人生の理想……一五二
十八、美なる神……一六一
十九、一切の美を完成する境界、不滅に關する考へ……一六九
二十、信仰の勝利……一七六
美の宗教から見た佛教……一八三
一、佛教の根本……一八五

二、實在、超在と含蓄との神……一九二
三、靈魂、業報、輪廻……一九六
四、涅槃と修行……二〇二
外篇……二〇七
我れとは何ぞや……二〇九
現代の文明と藝術と……二三一
天然の活殺……二五二
事實と觀念、寫實と理想……二七五
藝術と活動的生活……三四二
天然の趣味と歴史の趣味……三六八
ワグネルの理想……三八〇
ワグネルの戯曲に現はれたる戀……四〇七
演劇の使命……四三四

久遠の女性……四四六

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

挿畫

一、アンジェリコ筆、聖母……卷頭
（和かな筆つき、全幅の調和）

二、同上邊幅の天使二つ……一頁

三、フィリピノ・リッピ筆、天使が使徒ペテロを導く……二九八頁
（フィレンツェのブランカッチ堂の壁畫、遊逸の筆、力と落ちつき）

四、アンジェリコ筆、聖母戴冠……三二〇頁
（光明世界、聖者の交りの姿）

五、同上の一部、天使奏樂……三二〇頁
（天使の姿勢、接觸、聖徒の信念表現）

美の宗教

緒言

今茲に集めた手紙とその筆者の如何なる人であるかを明かにする爲めに一言する必要がある。

曾て夏休みにデンマルクに行つた歸り、スコットランドに渡つて、リイネ、て一夜を明かした事があつた。その時泊つたのは小なホテルク人で、北國の船長等が來て泊るドック際のルその主婦がオ、すの宗教家であつたが、小奇麗な居心地のよい宿であつた。

自分の隣室に何か病人が居るのか、苦しそうな咳の聲が頻りにして、その夜は爲めに能く眠れなかつた。翌朝、朝飯の時にこの事を主婦に告げたところが、それについて氣の毒な事を聞いた。病人はコペンハゲンから來た若い人で、風土を換える爲めに此處に來た處が、航海中血を吐いて、此處では病床に横はつた儘、命も危い。病氣は肺

でその上に水腫が加はつて居る。病が重いので動かす事も出來ないとの事。

主婦は中々よく世話をして居るらしい。一つは同國人である爲めてもあらうが、眞の親切でなくば、中々出來る事でない。病客は貴族で、國には領地も澤山あるとか。病の床についてから、一切主婦に任せて、宿代は勿論、看護、病藥の料、さては死んだ後の用意にといつて十分に金を托した位。又主婦の話しては、その若い人は旅に病んで居ながら少しも怯えず、隨分の病苦をも苦しそうにもしないで、いつも落ち附いて笑ひを帶びた顏つきを見せ、主婦始め誰れにても小さな事にも丁寧に禮をいふ。他國の旅路に重病であり、且つは久しからぬ內に一層遠い他國に行かなければならぬ身で、よくも覺悟を定めた者で、自分にも到底助からぬと知つてをるらしいと聞いては、憐れは一しほである。

全くの他人でも、行つてデヂマルク旅行の話してもすれば、幾分か氣を紛ぎらせるかと考へ、主婦に相談をして、名刺を托したが、直に來てくれとの事で、その室に案內せられた。

行つてその人を見ると二十五は越えぬらしい上品な壯年で、その品格の高さは自ら容姿にも見える。柔和な碧色の眼に廣い額、病床の上ながら鮮かな頭髮の人である。その容貌を一見しても思慮深い人と分かる。

少な時から英國婦人のガヂテスに育てられたとの事で、英語は中々上手であり、又英人の敎師について英文學が好きで、兼ねてコペンハゲンで、美術を修めたとか。色々浮世話しをして、その午後にリイスを立つ前には尙一度お見舞をしやうといつてその室を去つた。

都合で尙一日その地に滯在する事になつたので、その夕、復その人を見に行つた。室に入つて見ると病人は床の上で起き上つて何か

原稿を直してをる。何か著述かと問へば、退屈な時々に考へ浮んだ事を書留めておいた者がある、それを見てをる。その考へといふのは、藝術家或は詩人の眼で宇宙をどう見るかといふにあるとの事である。

それから話しは謂はゞ宇宙問題に移つて、互に打ち明けて話しをしたが、その人のいふには、今目前に迫つてをる死といふ事も、それ程恐ろしくもなければ、又忌はしいとも思へない。「死は何も一つ終りを告げるのでなくて、神が定めた一つの移り行きに過ぎない。神は愛と美との神で、我々を美の中に育て、愛の力で生命を作り上げてくれる。永遠の生命といふ望みは誰れにもある事で、畢竟人の生命が大くなり強くなるにある。その中には美と力との無盡藏があり、吾々はそれを開く爲めに喜び進むのである。

話しが熟するに從て、憐れの病客はその痞せた手てこちらの手を

握つて云ふには、「自分は全く美の崇拜者である、自分の信ずる神は美の源泉で、又美を實にする神である。それ故此樣に獨りて病に伸吟しても、靜かに終りを待ち、來ん世に何事を見得るかといふ思想て少しも寂寞にはない。」

人の生命の中に此の如く美はしく又大きな事があると信じてをりながら、而かも今殘忍な運命の爲めにその生命を斷たれやうとしてをる人が、此くまであきらめて、且つ光明ある望みに充ちてをるのを見ては特に感動を禁じ得ない。悲んだり怨んだりせずに、信あり、覺悟あり、滿足あり、且つ喜びと愛とに充ちてをる、その信仰は小兒の樣で而かも偉大のものといはなければならぬ。

心靈信仰の事に關して話しの出來る人に會ふのは、何週間かこの方始めてであるといつて、その人は大喜び。尙色々話しもしたが今一々之を茲に記す事は出來ないし、又下に集めた書簡の中にあちら

こちらに現はれてをる。然し茲に一二その時の話しを記さう。

「モスクワに行つた時であつたが、救主の御寺で大きな畫を見た。それは神を畫いた者で、白髮白髯の老翁を現はしてをる。中々の大作で又一つの壯觀ではあるが、どうも、無始の昔から我々の父であるといふ神を現はすには適しない。吾々の神には老年といふ事はない筈で、若し永遠の父を形にするならば、若くて強壯で美はしい理想に副はなければならぬと思ふ。若し自分の信仰を何とか名づけるならば美の宗教、或は美の崇拜といふ外ない。美といつても希臘人が見た樣な感覺に訴える美のみでなく、美を眞に大くし、淨うし、又理想的に見て、こう名づけて見たい。美は神の姿で、美のある處には神が現はれ、幾分かでも無限を吾々に示してくれる。美を感ずるのは即ち神を感ずるのである。」

餘りに熱心に話しつゞけるので、病氣に障はらうかと憂へて、話し

を他に轉じやうと考へ、床の上を見ると、英詩の拔萃集がある。

英國詩人の中ではキーツが一番好きとの事で、話しは又それに轉じた。キーツの長所は、その音調に如何にも微妙の點があり、その思想の細かで、そのいひ表しも微に入つてをる。特にかの若い詩人が病身で、氣の毒な一生に若死をしたのが同情の種となる。

詩は好きかと問はれて、それ程にもない、特に抒情詩の細かな感情は自分には十分味はへないと答へた。

世に詩の味はへない人があるかといふ樣な顏つきで、その人のいふには、「詩は自分の悲しい時の慰めで、美の味を味ひ、思想を高尚にし、希望を大くし得るのは皆詩の賜である。今日話しをした外、尙云ひたい事もあるが、病の閑には又手紙でゞも十分に述べたい。」それは自分も望む所故、尙文通をしやうといつて別れた。

出發前に尙一度會はうと思つたが、又病が重つて、醫師が面會談話

を禁じたとの事で、その儘にリイスを去つた。然るに憐れの病客は今度も病に勝つて、數週間後にその人からの手紙が來て、病氣は、餘程よくなつて今はブルテーフェリーの水邊に病を養つてをるといつて來た。尙數日を經たなら、此間の話しの續きを手紙で十分書きたい。此等の問題について手紙を書くのは却て氣を異にしてよいなど書いてあつた。そこでその返事には尙慰めてやつたが、次には又手紙が來た。こういふ樣にして二人の間には始終往復をして、その人の病床からの手紙は首尾完結したものを得る樣になつたのである。それ以外には別に言を加へる必要はない。憐れの友が病床で書いて、人間の生死に關した美はしい又深い思想を與へてくれた書簡その物を世に公にするのは、獨り自分の喜びのみでなからう。

一、言語の美、詩

今此處に病床に横はつて、參考書も何もない故、只前に見た物の記憶と自分の考へとを交ぜて書いて見やう。

吾々が詩を好んで見るのは、心を細かにし、思ひと言ひ表はしとの中に見える美に對する感じを養ふ爲めで、又詩は吾々の心情に訴へ感動を與へ、又色々の同情を惹こさせる。宗教の信心や愛國の精神も、又家庭の和樂や愛情の生活も、皆詩に歌はれ、又詩で養はれる。吾々が心に蓄へてをる理想、事實に現はしたいと思ふ考を表はすのは詩の天職で、人生は此等の理想で進歩と幸福との道を進める。

藝術(詩は固よりその一つ)は人間の有つてをる觀念を知の方からも情の方からも亦精神全躰でも包括して、調和と美との形で之を表はす。文學は人間思想の長い間養つて來た結果を代表する者で、人

生は詩人の宣示を得て益す良好の狀態に進む。詩人の示す所は皆世を導いて一層善良て眞て又高尚な生活に入らしむる。

藝術は天然の美を忠實に表はす、即ち天然を理想の方から觀、その深遠な眞相を紹介し、その中に存してをる秩序や諧調や又通常の思ひには上らない莊嚴と優美とを示してくれる。

詩人は天然の中にも精神の中にも存する美を握つて、人類の先見者である。彼等は人類の敎師であり又豫言者で、人間の情緒を高い思想と人を動かす筆とて表はして吾々の心を向上の道に導いてくれる。彼等は心靈の永遠の福音を宣布する人である。

君も氣附かれたであらうが、眞の詩人は、通常の人がその筆で表はそうとすれば數百言でも尙盡きない事を、二三言で寫し出して、美と眞相とを微細に又活き〳〵と示す力を持つて居る。

詩に三つの方面がある。

通常詩といふのは美の觀念を音律の言語で表はすので、色々の種類がある。內面の感動を主とする抒情詩、外の事實を說く叙事詩、人間の遭逢を說く物語、天然の氣韻を傳へる叙景、人の紀念や哀悼を表する挽歌、事件の中に內面の感情を表はす戲曲など即ち是れ。

戲曲即ち劇詩は人が努力と健鬪とて高い理想の爲めに戰ふ道行を記す者て、此は特に悲劇の目的である。悲劇の主人公はその目的の爲めに惱み戰つて、その人はその戰の爲めに死んでもその理想は生き殘つて終に勝利を得る。此樣な主人公の運命は吾々に此の如き不滅の理想(即ち神の一面)の爲めに生き、又此が爲めに戰ふべきを敎へる。

劇詩は詩の上乘であるが、特に悲劇は人生の最も高尚で又深遠な方面を代表する。君も知らるゝ如く、希臘人は悲劇を宗敎としてをつて、彼等の悲劇は宗敎の眞理を敎へる爲めの演劇て、その神祕曲を

見た人に益す神の精神を吹き込む爲めに演ぜられたのてある。即ち一定の齋戒儀式て身心を清淨にした後、相率ひて暗夜に諸方の神祠に詣てて、最後に演技の場に入る。今迄暗夜沈痛の歌を歌つて來た一行が演技の場に近づくと、その門口に一道の光明が漏れる。その場に入ると場内は光明晃曜してあらゆる美術て裝飾されてある。その中に神人が現はれて祈りをし、その後に神々や或はそれに關係ある人間の悲劇を演ずる。是れが即ち希臘人の神曲、悲劇である。この神曲に接して、觀者は人生の理想を眼の前に見、自分の利己情欲を滅して、高い利他の愛情を養ひ、神靈に倣ふべき事を敎へられる。單に敎へてなくて、眼で見て心に深く銘する樣に吹き込まれる。希臘人が悲劇を信仰の用に供したのは正當で、人生の力は高く永遠である理想に進むにある。吾々の理想は吾々自らの中に存して、吾等の生命は此の理想の爲めに存するのてある。此の世の生活は未だ

現はれない理想を實にし、この現世を彼岸に向けるにある。

次に詩を廣く見れば、總て吾等の想像と感情とを美の言語て表はす一切の文學となる。散文の中にも詩はあるので、例へば英國近代の藝術批評家の上首てあるラスキンの如きは、その詩的思想を散文て表はして、而かも大詩人の詩と同じ樣に調節と抑揚との妙を極めてをる。

第三に詩を最も廣く見れば、美を一定の形に表はす總ての藝術を含む。言語の調節音律に表はすのは、先に云つた詩。形と色との詩は繪畫。活きた形躰の詩は彫刻。無生物の形の詩は建築。律呂の詩は音樂。動作の詩は戲曲て、優美の運動は舞蹈。而して調節ある此等の美は宇宙の何處にも存して、顯微鏡て見える細胞の組織にも又望遠鏡に映ずる星の世界にも見られる。總て宇宙に存する物は神の思想が美の形と調節とに現はれたので、その根底は詩や音樂と

異なる事はない。

達觀すれば世界は一戯曲で、何れの人の一生も劇詩で出來上つてをる。人の心の中には思想や感動の見えない戯曲があつて、その魂は成敗の活劇の中に精神的戯曲を演じてをる。個人のみならず、一家で見れば、或は喜びの事、或は悲みの事、喜劇もあれば悲劇もあり、色々の曲を演じ、一家から進めば社會にも國家にも時代々々の戯曲があつて、その中には人情の高尚な方面もあれば劣悪なのも現はれる。この時の一曲一曲は又成敗興亡の大戯曲の一部分となり、進では生物の間の進化の中に美と完全とに進む曲を作り、尚大く見れば、無限の空間を舞台として、永遠の時をその動作の時間としてをる宇宙の大劇詩を作り、終局は終に見えない神靈に歸入する。

此の大戯曲の中には自然の生々が動いて、宇宙に遍滿し、その粹は人間の精神の中に神靈の美となつて現はれる。人が人生の理想を

見て之を實にしやうと努力するのは、段々に高い理想を見、その理想に向つて終には完全圓滿の生命に入らうとする渇仰の力から生ずる。宇宙の大戯曲の終局を望んで、想像にも上らぬ莊嚴の圓滿に進まうとするのは、人情の抑へ難く、又最も深い根底から出た力である。この理想は即ち總て藝術の高尚な作の中に響いてをり、又宇宙の進化となつて全世界に亘つてをる律呂である。

詩人Poetといふのは希臘のΠοιέω即ち作るといふ語から出たので、即ち創作者又創造者と云てよからう。詩人の天賦は美を作るにある。詩は宇宙の大戯曲の美を表はし、詩人はその宣示を司る、それ故詩人はあらゆる形の自然を愛する。彼れは變幻極りない雲色々の空合の畫の大空を愛する。山河大地の高大をも、優美をも、又嵐の雲の出沒をも、荒れまはる風雲をも愛する。夜になればその寂靜の大空に輝く無數の星の美にも見惚れる。笑む如き山水、日に照らされ

た樹木、影濃き林樹、一つとして美ならざるはない。彼れは喜んで輭風の囁きに耳を傾け、華の葉のそよぐを愛で、空中に天樂を奏する鳥の音にもきゝ惚れる。大きな者のみでなく、傾いた壁を蔽ふてをるはれてをる立派な花に劣る事はない。大きな者のみでなく、傾いた壁を蔽ふてをる苔も、生き垣の上から頭を上げるさゝやかな野の花も、又大庭園に養

冬になれば白雪が大地に衣を被せて無垢の淨地を現じ、その下には來ん春に萠え出やうとする復活の芽を保護してをる。

詩人の眼で見れば、自然は神の愛を表はしてをる詩である。吾々の目にも耳にも亦心情にも徹して心に訴へる美はしの畫圖は神の作として自然に存ずる。

獨り自然のみでない。詩人は人の心の中に愛情を起こし、希望、同情又喜ばしい想像を與へる。彼れは想像を面白くして且つ清淨で高尚な方に導く。眞の詩人は心情と思想とを淨らし強らして、高い

理想に向はしめ、又此の一生は決してそれのみで盡きないで、常に高く高く調和に進で行く無限の向上生活の一部分に過ぎない事を示してくれる。

詩人は外界の見える世界の中にその內面の精神を捕へ、又吾々の內の心の生活に永遠の意義を與へる。吾々の精神が不斷の進歩に向て、意識と力とを押し擴ろげ、生命の進歩をたどつて、精神を段々豐富にし高尚にし多幸にして、永遠に圓滿の域に進むのが眞の進化であらう。總て有限の生命はこの無限の生命、宇宙の智慧に根底を据えてをる。

詩人は色や音でなしに言語を用ひて情緒や動作を表はす藝術家で、世界の美を自らに得てそれを詩に表はし、自らの裏にある神靈の意識を自らの生命で實にし、神は一切の美と愛との始めであり終りである事を證明するのがその天職である。云ふまでもなく、韻文を

作る人が盡く詩人ではなく、一世に眞詩人たる人は、數へる程も得られない事は明かであらう。

眞の詩人がその高大の天職を果すに要する資格三つ。強い想像力はその一つ。創作力の十分なるべきはその次。而して詩人は之に加へて理想に對する熱意愛情がなくてはならぬ。此の力て詩人は見えないものを見、周圍の天然の中にも人の心にも己れの心にも常に新な美や調和を、發揮するの人。精神は内にも外にも亦自分以上にも常に探索の眼を向けるが、詩人には特に此の眼光が必要である。詩人は情緒に富むてゐなければならぬ、即ち熱意を要する。何物にも同情があつて感情に富んで自らの情を他の人のに融合し、他人の感ずる所を自らに感ずる力がなければならぬ。此よりも大切なのは敬虔の情火が熾なる事て、愛情の光明ある旗幟を翻へし、自然以上にある愛を見るが必要てある。從て又他の人をその卑い性能

以上に上らしめて理想の光明に導き、美の中に進ましむる。

人生の高い理想や、努力や、又勇猛の德、高尚の性格を下層社會の生活にも把へて之を熱情の言語に表はす同情は詩人の性能で、強い者に對して弱い者を助ける義俠もその資格に缺けてならぬ。過去に對して敬虔に、現在に對しては同情があり、將來に對しては光明を見るが詩人てある。

詩人には音律に對する耳の必要な事も明かて、その心を神靈の音律に調和し共鳴するを要する。その文章を美にする爲めには音樂の精神があると共に、外形に拘泥せず直に衷心を言ひ表はす文筆ある事は詩の第一義てある。それ故詩人の精神は、美と音律と調和とに充ちて、觀念思想と共にその言ひ表はしに長じ、最も高い思想が最も圓滿の言葉て發表される根底を要する。

詩の音律節調は心の中の調和を表はす機關て、その力で想像と感

情とに訴へる。此の如くにして詩は人生を動かす力となり、社會の風習や法律をも左右し、人類を敎育し、人間の神聖なことを明かし、その發展を促して將來を支配する。悲みの中にも喜びの中にも人類を指導するが詩の力である。コレリッジは云つたてないか、「詩の蔭で、自分は自分の周圍の事柄、自分に關係ある事物一切の中に善と美とを發見したいといふ習慣を得た。」

豐富な精神、修煉した趣味、平均を得た知力、信仰あり、希望ある精神、熱意の同情、その同情が終に豫言者的態度に熱する誠意、是れ詩人に缺き得ない資格である。詩の利器は直に人心に訴へる言語で、その目的は人心の祕奥を披瀝するにあり、その力は不滅。それ故詩人は美の宗敎の導師である。

約めて云へば、詩の眼目は心を高くするにある。總て善であるもの、美なるもの、又淨く大なるものを愛して、根本の調和に合體して、こ

の現世の生命は一層高い生命の序幕だと知らしむるが詩の天職。人間の天性、善美な方面を增長し、宇宙の美を天然の中にも知力の中にも心情の中にも發揮して、吾等のこの宇宙に對する愛を增し、吾等を最高神靈の美の中に同化せしめ、圓滿の美の中に生活せしむる、是れが即ち詩の天職。

二、藝術は美の創作

君は先の手紙以上更に美術に關して僕の思想を聞きたいと云はるる。その事を云ふについては、事によれば自分の云ふ所が他の人の云つた事と重複するかも知れない。といふのは自分が英文を學ぶ時に能く名文を暗誦して記憶した故、今述べる中にもそれ等が自然に文章の中に出て來るかと思ふ。寂寥の時にはそれ等の名文が自分の心の中で世界や人や神靈の美を說いて、自分の心を活かす樣に浮んでくる。實に美は自分の心を支配し自分の思想に時々の又永遠の光を與へてくれるのである。

それは別として、今藝術の事を云ふにも、決して狹い意味でなくて、云はゞ藝術は眞善美の三を一つにした理想又は價値の哲學の謂ひである。この三位一躰は道德や實際や美術を總て美の創作として

一括して、その作を圓滿な生命の理想として見る。

即ち美は、美術で吾々の美感に現はれ、道德で吾々の宗教信仰に表はれ、應用藝術で吾々の實行に關係する。言を換えて云はゞ、道德上の價値を心情で養つて、その力で吾々は聖徒となり、眞理を腦髓で養つて科學者又は哲學者となり、心で美を養つて藝術家となるのである。性格の圓滿といふのは即ちこの三つの完全な調和にある。

藝術的の心靈には音調、色、形、感情などの微妙の味が分かり、藝術家は宇宙の偉大な解釋者である。他の人が感じただけのを、藝術家は、能く又巧に之を表はす。總ての藝術は根本では一つで、色々の藝術があるのは、この一つの美が色々の狀態で表はれるに外ならぬ。この關係を思ふと、自然の中に現はれたのも、人生に現れるのも、美は生滅するのでなく色々に又段々完全に現はれる。詩人にしても畫師或は彫刻家にしても、眞正の藝術家はその作が如何に立派に出來て

も決して之に滿足しない。作品の不完全を知るのは藝術家自身で、有限な作は皆最終の美を理想とするからである。

藝術の作品は吾々が心の中に思ひ浮かべる美の相の片影で、心は常にその不思議の想像に上つて來る見えない理想を慕ふ。眞の藝術の精神心髓は、その結果の作品よりも、寧ろ根本の愛と渴仰とにある。心を見る、此れが藝術家の終局で、美はそこに現はれ、作はそれを形に現はす。

それ故、藝術の作品を出すには三つの作用が合してをる。創作的の想像力と、之に續いて撰擇し精撰する知の透見力と、之を實に現はす力と。

藝術には心の色々の渴仰を醫す力があり、人の心が傳奇的の好奇心現在の境遇よりも高尙な何物かを觀たがる欲望、無限の欲を起こす理想の要求、特には沈思の精神で人生を見る傾向、皆此處に滿足を

得る。

藝術は又實用をも具へてをる。即ち日常の生活の間に思想の食物を與へ、色々の興味を起こさせて人の幸福を增す。

一體人はその周圍の世界の中にある莊大の事や、道德の敎訓や又精神上の深義を看過するが、藝術は此等を發揮して人に美を示し、新しい喜びを與へる。自然が不盡である如く藝術も無盡であるが、人の精神が之を發揮して始めて力となる。

美は生命が調和の形に現はれたもの、神が相對の中に自らを示現するもの、美は洵に神の精である。

眞な者はその根底では美と一つ、美は又眞と一つ。近代の英國では美を愛する風が勃興して、家屋にも、日々の生活にも社會にも亦宗敎の儀式にもその勢力は見える。文明は段々美と密着して來た。

美を觀る第一は外形の美を認める、即ち感覺の階段。次は形の調

整を見る沈思靜觀の知力の階段。次は精神的の美を見て理想に進む道德の階段。科學は知識、哲學は眞理、宗敎は信依を目的とする如くに、藝術の目的は美の創作で、此等は相合して美即ち圓滿を作り上げる。藝術は宇宙に遍滿してをる美の寫しで、神の愛の表象である。然し藝術は歷史をも宗敎をも解釋して一時代の精神を發揮するばかりでなく、又人の日常生活の中に美を現はし、人の思想や感情や願望に意義を與へて、吾々の心を圓滿の境に導いてくれる。そこで藝術は人の成功や喜びや希望と共に、その悲みをも能く記錄してくれる。藝術は人類の道德を進め、精神の發達を助ける故、高尙の文明は人性の高い傾向を助ける藝術を奬勵しなければならぬ。

藝術は文明の美はしい花で、自然の中にも藝術の中にも美を發揮するが文明の精神である。一國の文明がこの精神を體して、卑しい快樂を高い方に導き、自然の創造者に心を向けしむる樣になつてを

る國は幸である。

約めて云へば、藝術は人生の最も豐富な直觀を集めて大成し、最も深い沈思、最も淸淨な渴仰努力を代表する。

此の樣な意義で人生の深義、永遠の生命を藝術の作に作り上げる人は即ち神の代表者ともいふべく、神聖の藝術家で、即ち美の神壇に事へる司祭である。

この司祭の最高なのは精神の美を生命として之に事へる人。形や色や又は音、又は言語の中に美を創作する人は之に次ぎ、第三は他人の作を解釋し闡明する人で、或は戲曲を演じ、詩歌を朗讀し、或は又作品を批評する人などである。

今迄は主として第二と第三とに就いて述べたが、此の手紙を終る前に少し第一類に就いて考へを書きたい。

心靈の方から美を愛する人は、自ら神聖の美の高い理想の前に立

つて、その爲めには何物をも犧牲に供し、徹頭徹尾その精神に隨順する高尚の生活を送る。

精神的の藝術家は道德の生活を理想化して、愛と眞理との黄金の絲で人生を縫ひ、人生を美はしうし、人を神に近かしめる。此の樣な美には感覺に訴へるより以上の美があり、その美が直に道德として現はれる。吾々は第一には美はしい形や色を喜ぶが、進では動作や思想の美を味ふ。即ち美は形の外に我を超えた高尚の人物性格に現はれ、又一切萬物の源である神の泉を愛する熱情にも現はれる。此の樣な美は人生に喜びと幸とを與へる光で、吾々の心がこの美に憧れるのは、即ち吾々の中に存在する神靈の火花といふべきである。吾々が性行の上でも性質の上でも又理想の上にでもこの神靈に近くに從て、吾々自身の美は增す。

求める心があれば神の美は至る所に現はれ、美は神の智慧の宏大

な力にも現はれ又最も深い神の心に根すといふ事を知るに至る。神の智慧と力とは何物をも圓滿に、即ち美にする樣に働いて、統一あり調和ある宇宙を作り出すのであるから、この世は即ち神靈の現はれ、調和と莊嚴との完全な美の舞臺である。

此う見れば人生はそれ自らで一つの藝術で、有形の藝術作家が外界の美を闡明すると同じ樣に、心の內界は美に進む努力の世界である。藝術は內にある思想情緒を表はさうといふ創作力一つから出て、その最大の美は最高の藝術に現はれる。世界人生の美はその源泉の不盡の愛の發表である。

三、戲曲

先の手紙のつゞきとして今日は君の戲曲に關しての問ひに答へやう。多くの戲曲を讀むで考へついた點は次の如くである。

第一に舞臺の上の藝術。俳優が色々の藝術を合一して、代表する事を歌つたスコットランドの一詩人の言葉がある。

詩は十分に雄大な思想を遺憾なく表はすには適せぬ。
繪畫には運動もなく言語もなく、時間の一瞬を捕へるばかり。
然るに技藝の神を得た役者は、假象に萬能の力を與へる、

その前には韻文も啞に同じく、思想も繪畫も屏息する。

戲曲の作者は人物を眼の前に見せ、心情を發露して吾々をして曲中の人物と喜憂、愛憐、畏怖を同じうせしむるが、俳優はこの作者の思想を活きた形で表はし、身も心も曲中の人になつて、その心情や運命

を現實に見せる。

この戲曲を演ずる場所は、即ち舞臺で、コペンハゲンでは之を一つの精神教育の場所として政府で維持してをる。劇場は人の性格や心情を高尚にし清淨にする文明の大機關である。

又他の點から見ると、戲曲は人生の道德的又社會の鬪ひを本にして、その人物の行動や生命の中に美を見せる。或は自由の爲めに戰ふものもあり、或は眞理に身を獻げるものもあり、又は愛情の爲めに死ぬるものもある。此等の健鬪を見て人の心は燃え立ち飛び上る。

戲曲に必要な事はその道德の理想で、或は德行、或は愛情、或は眞理、信義、忠勇、信仰などの中に人間の精神を見せ、人性の鏡の中に色々の人や時代の氣風、意氣、又は問題を映し出し、色々の理想の興廢を示す。

大く云へば、人生は大きな戲曲で、この現世の生活はその序幕に過ぎない。

希臘人は劇場を神聖の場とし、演戲を道德の訓練に用ひたが、吾々も亦此くすべきであらう。戲曲は最高の詩で、最も縮寫的に又印象を與へる樣に人生を示してくれる。現實の生活が單調なに飽いた者は、此處に趣があり意味のある人生の活劇を見、その感情の慰安を求める者、同感の必要を感じる人は、皆此處にその目的を得、眞摯も狂熱も、勝利も敗北も皆そこに現はれてくる。

人や社會の趣味が細かになるに從て、その同情を昂め、感情を淨める手段も緻密になつて、思想、感情、表情、動作の美はしい氣高い標本で民衆も敎育せられる。此の樣にして高尙な生活や氣高い人物や又優雅の作法やなどを見慣れて來れば、どうしても卑劣や、惡德や不義を忌み避け、その反對に氣分が高潔になつて、美はしく淨く善い事を望むに至る。そうなれば人の品性はおのづから總ての方面に氣高くならざるを得ない。

戲曲のこの目的を達する爲めには、之を演ずる俳優がその技術の理想を自覺して、それに對する誠意を持たなければならぬ。强いにも弱いにも、喜びにも悲みにも、人の心の色々の變化は皆自分の領分だと悟り、その技能で人を動かす熱心がなくてはならぬ。人の心に光りを與へ、力を吹き込み、支配し、高め、樂ませ又戒め、驚かせ又慰めるのは、皆自分の耳目言語の一擧一動の中に握つて、永久に觀者を感化する。此が俳優の理想、又此く出來るのが理想の俳優。

一躰に戲曲演劇は眞面目のもの、從て悲劇を要する。喜劇は一般に若い者を喜ばせるが、世故を經た者には悲劇が適する。人生は悲劇の場所で、悲壯は人生の力である。健鬪努力のない道德はなく、苦悶と精進の伴はない感情は淺薄のもので、精進勇猛 heroic は人生の美質の一發露である。人は悲壯の中に、又悲壯を經て、永遠の望を得る。然し實情を吐露すると、餘り深刻の悲劇は自分の感情を餘り刺

激するので、國にをつた時には多くさつぱりした喜劇を見て笑つてその中にユーモーを見て喜んだ。開濶な無邪氣な樂みは心を浮き立たせるが此も人生の單調を破る方便である。無邪氣の笑ひほど健康なものはなからう。然し喜劇が單に道化になる、事は餘程戒めなければならぬ。

開濶の方からいへば、オペラの歌と表情の舞踏との二つがあるが、舞踏は、云はば運動に表はれた詩で、婉雅と優麗とを主とする。單に身躰の振りを巧にして、東洋で見る如く、一人が舞ふて振りを見せるのは婉雅と莊嚴とを害する。西洋の舞は活き〳〵した表情や運動の中に優美、濶達を主として人の感情を表はす。本國デチマルクでバレットを貴ぶのは此が爲めて、君はコペンハゲンて見られたてあらう。悲劇ても喜劇ても、又オペラでも戯曲でも皆美の活きた現はれを色々の美術で集成したもので、その感化で人心を喜ばせるのみ

ならず、之に力を與へ、之を淨め又之に希望と慰籍とを與へる、人の過もあれば功も出る、惡德も、善德も、歡樂も悲壯も皆その中に表はれて、その力て人に人生を見せ、又自分の運命と天職とを猛省せしむる。そこには人生の哲理があり、人心の解釋があり、遊樂と共に敎育の力を與へる。今後の文明に戯曲の勢力と感化とが益す必要になる事は明かてあらう。

四、音樂

今日は日も照つて溫暖故、少し音樂について書かう。固より理論の事は研究もせぬが。自分は音樂が最も好きで、病氣になる前にはいつも樂器を友としてをつたのである。音樂は色々の方面から觀察出來る。理學から云へば、音波の振動の大さや數が音樂を作り上げ、ヘルムホルツの研究の樣に其間に深い關係を發見し得る。自分は考へてをる、音響は他の感覺の事柄にも基礎であり、一般に運動が發生發達の根本である如く、音波は運動の祕密を代表してをる。その音波を聞きとる耳は、この運動が心に入る關門で、云はゞ各七千絃を具えてをる立琴二つに同じい。その立琴には約十一のオクターヴが具はつて、一秒に十六半から三萬八千までの振動を區別する。通常の耳では約一千ばかり音の高低の度を聞き分けるが、練修すれば

五千までは進む。

此の振動が耳に來て、それから神經を傳はつて腦髓に入り、そこで心は音響といふ知覺を得て、その作用で愛や美や喜びの諧調を捕へ、天樂が此地の音樂となつて、靈に響く。音樂は音の配合に過ぎない、從て音樂の藝術の美はこの音響の數の關係に存する。その振動數の波が曲を作り、リズムを作つて、其れで心を動かし、或は感情に訴へ、或は身躰を運動させる。ハーモニーは整齊の美で統一の力を有ち、メロデーは運動變化の美で表情の力となる。

此等の事をいふのは、何も病室の中で音樂論を書くのでなく、一般に知れてをる事ながら、此等の關係に注意を乞ふて、君の音樂の嗜好を促したい爲めである。

音響の美は、根本では形の美と似て、數の關係から出來てをる。ハーモニーは全宇宙に亘つて音樂にも形色の美にも存する。音樂は

リズムとメロデーとハーモニーとで出來てをるが、それが感情の範圍に入れば物理の境を超脱する。

神の言語は天然の中に現はれる。瀑布の轟きにも、雷鳴の響きにも、海波の音樂にも、林間に歌ふ禽鳥の曲にも、叢にすだく虫の音にも、又小兒の笑ひの中にも、作曲家の創作、オラトリオや讃歌にも、皆神の語があり、之をきゝとり、之と相應する心靈に神の啓示を與へて、神の力と美と光榮とを現はす。音樂者、作曲家はこの宇宙の大音樂の一部分に觸れて、その中に充ちた美の靈を表象するので、彼等の作が不調和らしいものをも統一して調和を作りだすのは、畢竟世界の大調和に應和したものである。

天然は、云はゞ琴の如く、至る所に共鳴應和して、その大作曲家即ち創造者の心に存在する美を現はす。一見して不調和なものも、皆神といふ音樂者の大音樂中の一つである。その音樂の現はれてある

音律の性質として不調和のものは互に相消して、調和は益す膨脹し、その間の同感共鳴は愈よ擴がる。調和の音律はそれと同じ振動を他に生じて共鳴せしむる事は簡明の事實で、誰も知る所であらう。この共鳴は決して偶然でない。

科學的に音樂とは何物であるかといへば、只音波の運動や耳や聽神經の働きを説明し得るに過ぎないであらうが、今云つた見方から云へば、吾々の心の底に大音樂があるその音樂の作家は、又外界天然にも同樣の曲を作つておいた。宇宙全躰が一つの大合奏で、心も物もその大合奏の一部となり、宇宙の生命は大調和の大シンホニーとなつてをる。誰れも音樂には數學上の關係が存在する事は知つてはをるが、夫は説明の一局部で、その數字の關係振動の關係が吾々の情緒に訴へ、世界の見えない消息を音で表はす、その處に心靈の働き、神の力が見える。音樂は耳にとつては一つの直覺で、心に訴へては

天の聲、宇宙の生命、愛情、喜悅が人の心の情緒に訴へる聲である。この聲を直覺して吾々は自分の心の中にある調和を自覺し、又宇宙の大調和に共鳴して、此によつて宇宙のシンホニーの一部分に入る。

ヤンブリコの言に、

世界の雄大なシンホニー、宇宙の大圓球とその中に動いてをる星の共同調和は人間が地上で聞くよりも圓滿な又深奥の音曲をなしてをる。

希臘のヘラクリトスが、世界天上の球が大運動をして、それから生ずる音律が宇宙の音樂をなしてをると見たのも、或は又宗教家が天上には天使の天樂合奏があると見たのも此で、

吾等はその大なるシンホニーの音階の一つにして、その旋律はリズムある球面を廻り、世界の生命はその音律の中に感動し、

吾等の心は之に感應して、

茲に世には恐ろしきことも、不調和の者もなく、宇宙自らは一つの大いなる不死の生命となる。

詩は思想の言て情緒を動かし、音樂は情緒に訴へて思想を動かす。その中には人性のあらゆる情緒と共鳴する音律が惹き起す感應の力がある。音樂は感情に對する大勢力で、又感情で動かされ、雄大なもの、恐ろしい者、憐れな事一つとしてその支配に入らないものはない。吾々の同情や情緒はその力で深くせられ、細かになり、又強くなる。音律やその調和の力で吾々が動かされる事實から見れば、此等の音の關係が表象してをる宇宙の大感動、大喜悅と吾々との間には密接の感應があるのを知るべく、又この大感動を吾々の中に實に現はす力の偶然でない事を見得る。音樂の調和は段々に高く大きくなる。即ち吾々がまだ十分に觸れ得ないながらに心に憧れ求める

大調和の一端は、此に現はれて、この現世の別々の生命以上更に何者か大きな安養の狀態を吾々に保證するのは音樂の力である。吾々の理想は今の個々の生活以上にあるので、人間が色々の藝術で現はさうと勉めて、色々のギジョンを得るのは此の理想に向ふ道程に外ならぬ。その色々の藝術の中でも、特に音の藝術は抽象の理想を實に現はし、天上の調和を人間に開示する。

吾々の心に對する慰安は、人の生が一生のみでなく、又その世界は眼前の世界のみでないとの理想信仰にあるが、音樂の調和はこの信仰の保證で、愛と信と望との三一はその中に存する。その中には人の心一つ〳〵の感動が滿足を發見し、理想と美とに到らうといふ希求が現はれ又保證を得る。

世界の物質の微細分子でも皆音樂の中に入り得るといふが、實に何れの極微でも音のリズムに支配せられない者はない。宇宙はそ

れ自らて大音曲で、極微の物質から人の思想感情まで、一つとしてその合奏の一部でないはない。

音樂は人に理想を與へ、理想を感ぜしめ、又理想を保證する。吾々が愛と美とに進む道德の力も亦音樂に助けられ、養はれる。さすればこの宏大な宇宙に、驚くべく複雜で、而かも調和してゆく無數の絃を以て、一つの大きな琴を作つた神自らは非常の大音樂者ではないか。この大音樂者の與へた音律調和は、何の理想に向て進みつつあるか。

五、人生は精神美を開發する修練の場

二日二夜の間は全く身躰を動かす事が出來ず、ペンを執るもつらかつたが、今夕は坐り直る事も出來さう故、君の手紙に對して尙一つ書いて見たい。先の手紙に云つた精神美の考へをつゞけて行かう。

人生はそれを開發する修練である。

人生は逆旅ではあるが、その逆旅は意味のないつゞきでなく、人生の世界は、道德や心靈の修練の世界である。逆旅であるから何も彼も騷がしく、面倒で一見しては撞着が多く、苦惱が充ち、心は常にそれに擾亂せられる。然し此等の表面の喧擾の裏には高い目的がある、吾々はそれに向て進てをる。この逆旅は永遠の性情を開發する爲の旅路にある。神を愛してその美に似やうとするのは、神の永遠の

性に進むに外ならぬ。種から木が生へ、木が生長するにさへ時間を要するではないか。

性格の美は道德上の勇猛に表はれるが、眞の勇猛精進は勇氣といふ中での難事である。この勇氣あつて、卑い情欲を制し得、又この勇氣は貧富上下の差別なく持ち得る寶である。性格は人間の歷史、人生の活動の中で常に知よりも大切な力で、此の力が人の性情の主位を占める事は明かである。而してこの精神の粹は、人の爲めにする生活の中に、又平和の發達、愛情の力に現はれ、人は此の力で行を高うし、思想を淨うし、自覺を明かにして、身、口、意總ての行動を美の理想に進める。

一旦愛情で最高尙者に融合した以上は、吾々は自分と神との間に深い關係を知つて、神に依り、又神の中で理想に進みもすれば、その理想を元にして天然の中にも人生にも動く樣になる。此樣にして一

切の世事を向上の舞臺と見て來れば、現世は彼岸と密接し、現在は三世に亘る永遠の意義を有して來る。實に宇宙は一つの有機躰で、その中の色々の分子は相異なるながらに相協同して一つの目的に進み、何物も協同して存在し働いてをる。生命といふもこの大きな實在の一部、物質といふのも同樣で、實在は完全な一つである。その間の關係は無量で錯雜であるが、何物も皆な互に調和し影響してその變化の間に段々完全な圓滿の調和を發表し、人生の中には淨い喜びを增し、光明と美とを煥發する。

地上の生活は健鬪の場であるが、此も正當の精神で又愛の爲めに戰へば、吾々の心に在る勇と美とを發揮する場となる。誰もが宮殿に住むといふ事はこの世界では出來ないが、美の國に生活する事は誰にも出來る。この國は地上で見得る何れの宮殿よりも莊麗で、この美の壯麗は人の未來の住所であるが、又この地上でもその喜びを

味ひ得る。

問題は、この世で富有になり、又成功するや否やでなく、先の方を見、深い方に感じを有ち、宇宙の中に段々上の調和を發揮するや否やにある。人生の實は世間の富や榮達ではない。理想は至重の實で、吾々は其の眞意義と深遠の目的とを捕へなければならぬ。人生は眞摯の活動で、それを貫く理想の力で高尙な活動も出來、又忠實の仕事も出來る。神の能力が天上ばかりでなく吾々の心の中に開發して來るといふ事は實に吾々の奬勵である。神の立てた設計やその仕事が出來上らずに終るといふ事は吾々の考へ得ない事。それ故又この生は吾々の終局でなく、無限の進歩の序幕で、吾々が神の生命を得れば得るほど神の光榮と美とを開發する。

こう考へて見ると、希臘人が、天然の中、何處でも何物にも、生命は最高不死の美を衣服として、その一々の開發は各宇宙の大調和の中に

その處を得ると考へたのは正當となる。

吾々の限られた見方から見ても、人生は事實であるが、吾々の想像が現世以上に馳せるに從て、何れの極微にも何れの細胞にも美と調和と幸福とを代表する生命ある事を知る。生命は何處にも存在するが、又何時も進歩し開發しつゝある。

最高者に觸れるに從て吾々は益す高く憧れ求める。猶太の豫言者が高い處から命令した樣に、「汝は汝の心を傾け、汝の魂を盡し、又汝の力を盡して汝の主なる神を愛すべし。」然し又詩人の言つた樣に「何れの力でも愛を強ゐる事は出來ない。」それ故神を愛せよといふ命令も吾々の魂が深く美の神を愛すべきものと十分に悟るまでは行はれない。此の愛があつて始めて彼の命令に從ひ得、又その愛は愛せざるを得ない愛となり、大な喜びとなる。

生は喜びである。感覺は皆吾々の心を愛で充たす永遠の喜びの

關門。感覺があり知覺があつて吾々は生を愛し、自分の生存を維持し、その幸福を增進しやうと勉める。誠の生命は獨居でなく共同の生活にある。吾々の生命の眞義は他の人の生活と共同するにあつて、色々の惱みが此の世にあつても、此は人生必至の法で、他人と共同し、その爲めに惱むのは吾々の罪亡ぼしといつてよからう。高尙な生活といふのは必しも大事のみでなく、小事でも他人の爲めにするにある。和樂の顏つきでも、瑣末の親切でも皆その一部分となる。愛と喜びと驚きとを十分に發表する生活は最大の寶である。

生命は何處でも何時も進で、その十分の眞義を表はさうとする。吾々が理想は到達せられるに違ひない。理想の永遠の生命は此世でも彼の世でも現はれ、今の世に既に始まつてをる。始まるとはいふが、時を經なければ出來ないのでなく、時も處も離れてその眞義を捕へる處に永遠はある。無常流轉の中には苦惱もあり死もあるが、

永遠は永存して、苦惱をも滅亡をも離脱する。

生命ほど貴い者が何處にあるか。生命の如く美はしいものが他にあるか。生命、永遠の生命に向ふのが道德で、生命を開示するのが藝術、生命を開顯するのが宗教。

生命の理想は自覺して他と共同するにあり、その共同の範圍と品位との大く深い處に生命の價はある。金砂の如く散布してをる世界の中にも、又總て見える物を超えた處にも、生命開顯の餘地はあつて、美は何物の中にも、現はれる。

この世、無常流轉の中にも永遠の生命は芽ざして、美の神を愛する不滅の生命は苔を蓄へてをる。精神の世界では神が中心で、愛が空氣で、美が光り。その美の光は、形や色や、音や又運動のみに限らず、思想にも感情にも、又性格にも動作にも遍流の光明を與へる。美の普曜躍動即ち神の性である。

終にミス・プロクトルが生命と愛情とを歌つた句を引かう、

Life is only bright when it proceedeth
Towards a truer, deeper life above;
Human Love is sweetest when it leadeth
To a more divine and perfect love.

六、愛は美の所生

人生は美を開發する修煉の生活て、愛は人生の最大の力である。

愛は美から生ずる。美と愛とについて思ひ付く點を君に書き送る。

生存といふ藝術は磨き上げられた愛て、生存の大本が愛である以上は、行動も亦愛を本にするを要する。愛の目的は人格の融合にあるから、その目的を達するまては衰へず、又眞の愛は永續する。それ故、愛情は人生の最要事て、愛が關係しない人生もなく、又愛て成しとげられない事もない。

愛は總ての人の生活を動かし又之を感化する。愛なしに眞の幸福は得られない。

愛が一生の原動力になれば永久の力である。

愛は現世以上の生命の至寶である。

愛を歌ふ詩人は人間に代つてその眞の心を歌ひ、宇宙の精神を表はす。

詩も科學も同じく、色も歌も愛から出て始めて美であり、美は愛から出るといふ眞理を敎へる。

家に在ての幸福は家庭を愛して、質素の中に天然の美を愛するにある。

愛は地上の最も貴いものてあるが、その理想は彼岸にあつて、永遠の愛に向て進むにある。

人の性は愛の中て自らを圓滿にしやうとする。

愛は私情、私欲を滅ぼして一切惡德の根を絶つ。

愛は心の色々の働きを刺激して、心はその力で膨脹し、愛の日光にあたつて生長する。

愛の力で人を益し、又人にも益せられる樣にするが、眞の自利利他。

何物でも、吾々が愛し敬ひ重んずる者を永久にしやうとするは人の性。

愛情の發表は獻身で、此の力で總ての人の心情が結び付けられる。

愛すればつまらぬ場所も淨くなり、愛すれば何れの風景の中にも美を見、愛すれば卑い者をも高うする。

神の愛は人の愛の源で、この源泉を汲む者は共に兄弟である。

人生の要義は他人を助け、慰め勵まし、又吾々の中にある美はしい愛すべきものに慰められるゝにある。

活きるのは愛するので(To live is to love)神の愛を躰して始めて生命の眞義は現はれる。

愛は與へ、世話し、人の爲めに善をしやうとする。誠に愛するといふのは人を惠む謂で、取るのでなく與へるにある。人を幸福にして、それで自らも幸福となる。吾々は何れの人に對しても、その人を愛

し得る樣になる事を勉むべく、愛に敵する敵はないと覺悟すべし。

愛は深い同情の謂で、二つのものが圓滿に調和協同する事、心の底での一致、心と心との融合。

人の生活は美と愛と喜びとの三つを一つにすべし。

愛は富よりも、位階よりも、名譽よりも、權勢や奢侈よりも遙に貴い。

私を棄てた愛は吾々の情緒を高尚にして、高潔な獻身の行や、比ない勇氣も此から出る。

死後に至つても存する愛情は強い愛である。

人の人としての勢力は驚くべきもので、吾々は知らず〳〵の間に愛を以て人を感化し、その感化に觸れる人の中に潛むでをる最良のものを發揮する。

愛は心を開き、總て周圍を神の笑みに充ちた樣にする。愛は常に物を造り上げ、それに觸れるものに總て美の色彩を與へる。

愛の力は神を顯はして常に天使の如くに世界を周つて、何れの處にも幸福の種を蒔く。

愛があれば必ず人を惠み、その惠みは獻身をも辭しない。それ故如何な貧民でも愛を人に施す事は出來る。

幸福は愛の祭壇から立つ香煙。

思想が絶待の眞を求める樣に、心情は絶待の愛を求める。人の世では絶待は得られぬ。神の愛に近くが即ち絶待に近く所以である。

世界では人が最も貴く、人には心が貴く、心では性格が最も大切で、性格には愛が最大である。

愛はそれだけでも美はしいが、又他の事物を美にする。愛の美は光明の周遍の如くで、四邊を照らし、太陽には新しい力を與へ、星には新しい光輝を與へ、花には新な光彩を與へる。趣のない日常の生活も愛で輝き、家事の面倒もそれに照らされ、日々の勞働も愛で金色を

放つ。神の愛——それが齎らす喜びと力と慰藉とを、何人か遺憾なく描き得やう。神の愛の吾々に與へる力は想ふだに及ばぬ。

愛の要はその力、その耐久の力とその淸さとそれから無私の心とにある。

愛は常に大きく擴がるべきもので、家族の愛から親族、鄕黨に及び、國に及び人類に及ぶ。

愛、特に無私の愛は大きな果を結び、又大きな報を與へる。只自分の爲めばかりにして、他を愛する事のない人は、自分自らが自分の死を悲むばかりである。

愛は無限に觸れる。美は尊敬を起さしめ、愛を呼び出し、愛で一つにならうとする。人は常に愛の淨い旗を揚げるべきである。

誠の福音は、神の愛を人生で解釋するにある。神は遠く離れた冷淡なものでなく、その性が廣いだけその愛も廣い。神の愛は人の生

命に宿る。

美は藝術にも、詩にも歴史にも、人の心にも、善の行にも、又聖者の一生にも見える。美を愛する愛が眞の無私の愛である。

愛は總て萬有の謎の鍵で、又友なき人の慰籍者である。

愛は心情の中に歌ふ鳥である。

吾々が神を愛する愛は、假令至高者から見れば云ふに足らぬにしても、必ず神に認められる。此の自覺を持つて見れば、世界は吾々の光榮を讃嘆してをる。

神の愛に導かれる生活は段々高きに上る。一生の中には過失も缺點も多くはあらうが、愛に導かれて高く上り、卑い生活を遠かるに從て、過失も缺點も脚下に段々小くなる。

愛は大きな力、生命の淨め、神の救ひの力。愛は人を高め人を救ふ。神は吾々を愛して、その愛て吾々を感化し、吾々の中に潜むでをる美

はしく高い性能を發揮してくれる。

愛に色々の種類もあらうが、神に對する愛ほど美はしいものはない。その愛には尊敬と感謝とが籠もつてをる。此の愛はその初期の微弱の狀態にあつても深い眞の宗教である。此の愛の中では吾々は自らを棄てゝ、自らの中に神靈の宿るを悟る樣になり、その悟りは又吾々が終には永遠と融合すべき喜悅を今から感ぜしめる。此の愛は人を神に合して、人の生活を神に似せしめる。融和、親愛は愛の根本律である。

吾々は神の愛の自分の中に宿るを自覺して生活すべきで、此の自覺は性格を高うし、人生に光榮を與へる。神の美が自らの中にあると知り、その眼で見ると萬物には天上の美と光榮とが映じてをる。

憧れる爲めには嘆すべく、嘆美する爲めには愛すべし。愛の生活には神が現はれ、愛は總ての難問を解釋し、又最高の理想に對する希

望を確にする。

人の愛は即ち神の愛で、愛は人の中にある神。

愛は藝術の源泉、道德の原動、信仰法悅の充實、知識の天啓。

神の圓滿はその愛にある、愛の至極は自らを他に發見し、他を自らに融合するにある。

誠に愛すれば、人と人とは一つになり、彼れと我れとは同じ愛情の溫さの中に呼吸し、人と共に幸に、人の爲めに幸に生を送る。

今までは蜜を甘しと思ひ、

百合は美はく、星輝くと見しが、

此は君を見し前の事、

甘さと愛と光との女王を見し前の事。

戀愛に此の力があるもの、況して神に對する愛に於てをや。神の愛の中には蜜も甘さを增し、百合の花にも神の惠みが現はれ、星の光

にも神の智慧が輝く。「大空の鳥を見よ、彼等は自ら稼がず、又穡れず、さるに汝等の父は之を養ひ給へり。野の百合の花は如何にして育つかを思へ。神は今日野にありて明日は爐に投げ入れらるゝ草をも斯く裝はせ給ふ。」

愛の中には總ての最善最美が見え、愛は總ての卑劣を遠ける。

愛は人類を一家として、一つ心に結び付け、老若、男女、貴賤貧富の別を沒する。親と子とを結び付けるも愛、兄弟を一つにするも、朋友を親ますのも愛。若い人の心に熱を與へるも愛、老年の人の面に美はしい喜を現はすも愛。人の一生、生まれ落ちてから墓に入るまでの道に神の光を與へるのは皆愛の力である。

草花が露に濡ふて涓を吸ふが如く、日の光が紅の花には紅の光りを、青葉には青い光を與へるが如く、愛は周遍して萬物を活かし、萬物を一つにする。愛は融合で又調和であるが、美に調和するから又醜

を遠け、善に合ふから惡を斥ける。愛は火と同じく眞金を鑄る爲めに垢濘を燒き盡す。

愛は心の眞の養ひ、眞の惠み、知慧の光りも德の力も此に養はれる。吾々は理想に向て進む、その理想の神は常に愛を湛え、愛を漲らし、愛を溢らす。人の心に宿る愛は神の愛の入口で、人の不滅は神の愛の中に入るにある。宇宙の美の源泉、神の愛の調和の中に入るにある。

人生の音樂は愛を根本の音としてをる。萬有は宇宙の美と調和とを表はすべき生命の機關で又愛の立法者。

愛は精神の融合、社會生活の要素で、又人と神との結び付けで、神を崇拜するといふのは之を愛し、之を信頼し又之を畏敬する事である。人の世には不調和や矛盾が多い樣であるが、神の愛の中に入つて之を見ると、此等は皆希望と喜悅との準備である。生滅の世の中に不滅なのは愛。神、美なる神に對するとその相好の中には無限の愛が

照り輝いてをる。

人の世には愛情の失望もあらう、その失望の悲みの深さは云ふまでもない。無垢の心で相愛した青年の男女が、世の束縛で愛情を縛られる事もあらう、又一方の滿幅の愛がその酬を得ぬ事もあらう。然し眞の愛情は此だけで失望しない。一旦の愛の外に永遠の愛がある。一人の愛以上に神の愛がある。

不幸の失戀で身を亡くする人は憐むべきである。一旦の失望にも愛を失はず、心と心との愛、人と神との愛に力を得る人は幸である。心と心との愛は世間の殘忍も之を切る力はない。人と神との愛は如何なる失望にも挫折する愛はない。此の愛は一旦燃えて直に消える人の世の火でなく、永く續けば續く程溫かに又光りを增す天上の火である。年は經り、代は換はつても、久遠の愛は無限の愛で無限に進む。

七、個人から見た美の宗教

愛は美から出る、その美を愛し、崇拜して、段々と高い美、深い調和に進む、そこに美の宗教がある。この考へを特に人の方から見て君に書き送らう。

吾々の精神は根が神に通じてをる故、その心を神に捧げ、神の美を仰ぐ、此處に吾々が人として(社會を措いて云へば、個人として)精神の美に對する關係がある。神を愛するのも、人に同情するのも、皆この關係から出て、人生到る處に美を發見するのが即ち心を神に捧ぐる所以である。

心がその根本源泉に入つて神の生命に入るには、始めは受動て美に打たれ、それが相互の愛となり、此處に二つの靈の融通、合一を生じ、人と神と、人の意と神の意とが愛の中に一つとなる。

神に限らず、心が強い愛情に動かされた時には、必ず自分の愛がその相手に納れられ、愛が雙方互になる事を望む。神に對しても同じく、神の美に打たれ、之を仰げば仰ぐほど、その美に對する渴仰を增し、又益す美を深く大く見て、知らず〳〵の間にも自分の中に神の美を幾分でも又固より不完全でも同體し體得し又發表しやうとする。此ういふ工合で、心は段々に愛の中に進で高くなり、渴仰、尊信の情で淨められ、萬有の美の源泉、自分の心の源泉に引導せられる。

美の宗教では、人の思想も行動も感情も皆偶然で動かず、根本から出る樣になり、神の美、神の愛を元にして動く。同胞を愛するのも、自ら行を正しうするにも、惡を忍ぶのも、成敗に動かない樣になるにも、人の爲めに、身を献げるにも、皆この大本に基く故、その力は道德の命令よりも強く大い。そこで心は人に對しては柔和に、溫情を帶び、而かも深い思慮と信仰とに基いて行動し、自らの中には神の力を得て

健剛になる。柔輭と健剛とが常に一つの根から出て、始めて道德の努力の眞義を得る。

人生、道德は美の神の摸範に從て性格を作り上げる努力に外ならぬ。神は吾々人間をして人の世を幸福の樂園に化せしめやうとする故、吾々がその美を見、美を愛すれば、心は光明に充たされて、その光明の迸りで周圍の同胞を幸福にする樣になる。悲みの重みを減じ、暗黑を照らして、自らをも人をも同じ光明の世界に住ましめるのは神の美を愛する者の特權である。神を愛するものは人を惡まない、否惡む者をも愛して、終に同じ愛に入れる。怨を以て怨みに報ひ、惡を以て惡に對するのは、尙未だ神の愛に入らない人で、神の寂光を望むでその一分を得たものは、その光りて四方を照らし、惡を善にし、怨みを喜に轉ずる。太陽の光線の一分を得て紅紫の光を放つ花は人を喜ばせるでないか。神の愛の一分を得て他を愛する者が如何に

して終に他をして己れを愛せしむるに至らない事があらう。

神自らは喜と愛との源泉で、吾々はその愛を得て又自ら一つの源泉となつて神に似るを要する。身心の健康を增すも喜と愛との心。容貌の中に愛の光が現はれるにも、心が愛と希望との光で輝いて居なければならぬ。この心ぞ能く自分の中の劣情をも追ひ、又他人の惡心をも和げる。吾々の精神の美は同情即ち調和にある。此の精神があつて、吾々は他人の中に美のあるを發見し、何物の中にも優れた點のあるのを見て、之を愛し之を敬する事が出來る。

幸福と云のは、多く得る事でなく、得たものゝ中に多くを發見して、それを十分に樂むにある。悲みの中にも喜びを見、又悲みを超えて喜びに進み、假令へ罪に陷り過を犯しても、それに勝ちつゝ理想に進む。此が眞の幸福で、喜びをのみ求めるのは却て苦痛の本、罪過に屈托するのは、其れをぬけ出る路でない。吾々の愛は道德努力の原動

力で、精神の美を發揮するのは即ち永遠に進む所以てある。神を愛すれば、吾々は已に神の中に入つたのてある。

眞の愛から出る喜びの泉は盡きない泉、常に迸り四方に流れてそれに觸れる人に惠みを頒つ。ルーテルの云つた樣に「愛は心の生氣て、愛の相手と永遠に合一しやうとする情てある。」その相手が高ければ、高いだけ、理想も性格も高くなり、大きければ大きいだけ愛の力、道德の力は大くなる。然れば吾々が神を愛して人と神と一つにならうとするその愛の力は人生に於ける至高至大至深の力ではないか。この力の中には無限が現はれ、その人の中には神が生きてをる。

此の高い目的に向て神の美を得る爲めには、常に精神の源泉に向ひ、日々に美の神と思ひを交はして、終に神の美を自分に得、又自分を神に歸しなければならぬ。その神靈、その美の一分を得れば、吾々の心は神の笑みの中に笑み、吾々自らは神靈の美を代表し、又その中に

優遊するに至る。人間は終に人間て、直に神てなく、有限は直に無限てなくとも、その人間が神に似、その有限の中に無限を表はして、愛と美との圓滿な神靈に到る大本を得る。

此の樣な考へと覺悟とが吾々の日常の生活を感動する事は特に注意を乞はなければならぬ。

身體の上から云へば、此の思想は身心を開濶にし、從て強壯に健康にする。何事をするにも、神の力に動かされ、又神の光榮の爲めにすれば、事業が活きて來る。いやゝ〳〵從事するのでなく、心の奥底から勇み進て從事すれば、その事業の中に最大の力を發揮する事が出來る。又その感化て他の人をも動かし、子孫後昏を勵まし、總ての人に一層光明のある精神、喜ばしい心持て一層健康な身體の中に益す勇氣と忠實と喜悅とて何事にも從事する樣になる。

知識の上て云へば、此の愛から出た知識は皆眞理の爲めの探求と

なつて研究するにも益す熱心に、益す愉快に感じ、總ての得た知識が統一のある光明に照らされるのみならず、又益す眞理を求め、眞理に近かうとする努力と力量とを增す。さうすればこの知識は又總て自他の幸福を增す力となつて、自らの滿足と共に人をも同じ滿足に引き入れ、又已に得た知識、現在得てをる知識の外に、それより先き、それより以上の眞理を求め、求める中に又先見、透觀、洞見する明を得る。多くの科學者の探求は皆この精神に皷舞せられ、又この洞見に導かれたのである。

道德の方で見れば、此の愛は高い理想を與へるから、從て卑い情欲を壓倒して、自ら克ち自ら制し又自ら重んぜしむる力を齎らす。

社會から見れば、同情の中に人と人とが相助ける樣になつて、弱者を憐み救ふ事もその中から出、又單に弱者を救ふばかりでなく、總ての人に同じ愛情、同じ理想を與へて、同じくその道に進ましめる。

美の愛、愛の美が心に充ちたならば、宗教は此處に現はれたので、吾々の命は總て神に捧げ、愛の源泉に歸し、美の光に攝せられ、この地上に已に神の美を見、自らの精神の中に神の愛を得て、心は皷動し踴躍して、信と愛との生命となる。この生命の中にはこの地上に天國を作らうとする望みも出、自分自らの中に神の心を得た喜びも生じ、天も現はれ、愛も活き、美のある處には愛があり、美と愛との中から喜びが出、眞心の見神を得て大法喜に入る。

平凡の方面に歸つて、娛樂でも決して單に時々の快樂に委すべきものでなく、此の美の愛を本にし、意味のあるものにし、それで知や德の增進に助け、又身心の健康に資する樣にしなければならぬ。娛樂に統一した理想の根底がないと、それが肉欲や不德に陷れる緒となり易い。

それ故、働いてをる時も遊ぶ時にも又研究にも、禮拜にも、何事にも

何時でも吾々の靈を磨く美の開發といふ事を目的とし、又それを力にしなければならぬ。

神の美が十分に開發する處には眞の愛が現はれ、その愛の信の中には人生の如何なる暗雲も消えて、神の美の光が輝き、何物をも照らす。吾々はこの光に背を向けず、總てこの光明に接する樣にして、吾々自身の中にもこの光明を燿かすべきである。

八、社會の方面から見た美の宗教（上）

第一に斷定したいのは、人の社會的生活の價値は、吾々が他人に善を行ふ多少に依るといふ事。社會の生活でも又家庭でも必要なのは開濶な愉快な精神で、能く自ら滿足して人を愛する事。人に過があれば、我も共にそれを負擔して同情を表し、自分の實例で、人は皆神に賴つて活きるべき事を示す事。

利を貪り、財を浪費し、奢侈に流れるのは現代流行の弊であるが、之に反して高尚の生活といふのは、假令簡單質素でも愛と希望とで幸福に、假令卑くとも、事業に忠實なにあらう。人と我れと同じ同情、同じ喜悅の中に住めば、此處に人の心にある美の宗教は社會的の宗教となる。幸に現在社會の一部には美の好尚が進んで、家居や周圍に

趣味を加へ、家庭を美はしうしやうとする風は追々普及してくる。曾て君に書き送つた如く、自分の健康と美とに注意するのは、自分の務めばかりでなく、又周圍の人、特に家人に對する務めて、心を若やかに新鮮にして希望の光明の中に住まなければならぬ。又他の人と協同して自分の屬する社會とは小事にも調和しなければならぬ。此等の精神を養ふには、神の精神を汲むで生活するが必要である。

自分の周圍や所屬の社會は己れにとつて大切の勢力であるから、その社會と協同し、又之を感化して、衆と共に神の道に進むのは宗教の大事である。

人は只衣食住のみて滿足せず、尙他に高い欲を持つ。生活を趣味のある樣にし、愛情を求め、又娯樂や交友を要し、將來に希望を抱かずに人は活きられぬ。財産の點では社會に平等はなくとも、神に命ぜられた、高尙な美はしき生活を送らうと求めたならば、人の眞心一つ

で、人は皆同等にその幸福を享け得、又受くる樣にすべきである。奢侈は貧しい者に得られないが、人生の趣味、美の好尙から出る幸福は少しの財でも得られ、又之に注意するものには必ず得られて、此の點では人は皆平等である。富める人は必しも幸福でなく、貧い者にも神の惠みは充ちてをる。

社會に生存するものとしては、吾々は他に善をなし、場合によつては自らを犧牲にして他の爲めにするのが生命の標準目的である。饑えたるものに食を與へ、衣なき者に被せ、人の心に喜びの春を與へ、又神の愛と美とを信ぜしむる。此が光輝ある生活で、生死共に此を理想とするが人生の道である。

物質上の自由を得るのみが人生でない。如何に農業が興つて食料が出來ても、之を食ひ得ない民が多かつたなら、その農業は何の爲めに存するか。如何に工業が盛になつて、絨衣絹布が澤山出來ても、

又如何に山林を經營して材木が豐になつても、天下の民が大多數は破衣を纏ひ、家を失つた流浪者が世に充ちたなら、此等の工業も何の益に立たう。總て物質上の發達は天下の民衆に食住を與へる爲めでなくてはならず、而して此の衣食住は又それで生活する間に、人が互に相愛し又神を愛する生活の方便でなくてはならぬ。此の世の泥を排し、岩角を削つて「美の都」を建てるが、「美の神」の僕の仕事たるべく、この仕事の爲めには眞心の信と滿身の勇氣とを以て之に當らなければならぬ。「美の都」、「愛の國」の住民は自分獨りて善を樂むてはならぬ。

吾々は世界の災をも痛みをも感ずる、感ずれば感じただけそれを排除する樣に知識の應用を盛にし、又その實行の力を發揮しなければならぬ。此が爲めには吾々の心に神の御心を充たして、社會の同胞を愛し又憐むにも、彼等を苦める害惡を切に痛むにも、彼等が被る

不義の暴虐を憤るにも、又彼等の爲めに働く熱心にも、彼等をしてその心靈に潜むてをる善心を發揮せしめやうとする努力にも、何事にも總て神の心を心として衷心の愛情を注ぐべきである。

此が即ち社會的宗教である。

美の宗教は啻に個人の生活を刷新するばかりでなく、社會的にも國民的にも人の生を改新する熱情を與へる。

社會の同胞の爲めにその惡德や害惡の根を斷ち、その生活を幸福にする爲めに社會の改良を計るが、美の宗教の社會的活動て、此が爲めに吾々の心は、この理想の前に心跳り勇湧く思ひがなくてはならぬ。この熱情て美の理想を社會といふ團躰に冶ひ上げて、此の團躰が能く人道の爲めに、弱者を助けて、棄てられたものを救ひ、惡政に虐げられた者、社會の不義や、强者の私欲に害せられたもののなくなる樣にしなければならぬ。此の情は何れの人の心にも潜むてをる故、

若し十分に之を喚起したならば、その協同の力で社會の惡害を絶ち、墮落や貧困を救ふに足るべきである。

社會的に事業をするのは個人の性格を冶ふ上にも大切で、同胞の爲めに働けば、その間に又其間におのづから自分の心の美質を發揮する。人の性格は社會國民の一部となつて働いて、始めて十分に開發する。慈善事業を起し、社會的運動に從事した人々の實例は十分に此事を證明する。彼等の心は熱情と希望とに充ちて、一事を起し、一難に遭ふ毎に力を增し、人の爲めにする間に自分を鑄冶し修練した事如何ばかりであらう。此は獨善の人に得られない力である。

此ういふ宗教では、教會の職務は一層必要で、一國の中の高尚な仕事には教會が常に先導すべきである。宇宙の進化の中に互に助けて働き、相共にその進運に參與すべき者として、總て人類は一致の團躰で、人の心は此の大きな教會で一體となるべきである。人は固よ

り個人として一つの目的で、他のために存する方便ではないが、その個人の個人たる所以はこの協同の中に實にせらるゝ。社會の中で人と共に段々と高い性格を發揮して吾々は今日の位置に到つのである以上は、この社會といふ大調和は人間の本性から出、又最終の理想に向ふに必要の團躰である。

吾々は社會的に生活して來たから、今迄段々に野獸の性質を脱して同情深くなり、私情を去つて正義仁愛の德に進み、惡德を歷して信や愛を發達して來た。それ故社會生活の目的は性格の人を作つて、人の生活を高い理想で導き、義務の道で協和せしむるにある。人と共に心を同じうして生活するのは、實に忍耐や勇氣の美德を養ふ所以で、國民の生活も、人類の繁榮も基を此に置く。

社會には色々の問題があつて、學者や思想家の腦髓を費すべき者が甚だ多い。教育の問題、貧民問題、衛生や犯罪や、飲酒や何かと一々

數へ難いが、此等の問題の解釋を一貫して美と愛との心の團結が第一要件である。

愛といふのは人の爲めにする事。多くの人は人に務めさせるのを好て、人の爲めに務めるを好まないが、愛の生活は人の爲めに務める。富の力て人を我意に從はせやうとのみ勉める人は終に咀はるべき人て、此の如き人は社會の人たるに適しない。

美の生活は質素の中にも美を樂み、美の中に人と共に樂む。徒に傲奢を衒つて、自分のみの見えを貴ぶ人は、美の何たるを知らない、やはり社會の民衆と共に樂む大きな樂みに緣なき人、憐むべき人。

自分の理想と性格とに忠實で、義務を盡し、事業をする中には、一切の美の源泉に觸れて益す高尚の生命に進む。この樣な生活は獨り神に喜ばれるのみてなく、又人と共に樂む事が出來、人を感化して共に神の子となる生活である。此の生活の中には社會が眞の協同和

樂を得て、宗教は人類を統一して、美の宗教の教會が直に人類同胞の社會、愛の精神で結びつけられた聖徒の團躰となる。

此に至ると、人々は自然に相率いて、身躰や道德や思想感情の美の中に生活して、その信仰の光榮を表はすであらう。人の意識には我のみでなく同胞と共同の廣い意識が生じ、理想は高く、德は盛に、愛の中に神を讃美する樂園を生じ、その社會は眞心の協同で成り立つに至らう。法律も政治も皆此の協同の機關となつて、法即ち愛の關係となるに違ひない。

此の樣な社會生活の樂園は先づ家庭から始めるべきで、家庭は宇宙の大調和の雛形て、社會は和樂の一家族たるべきてある。家庭の中ては、特に妻たる者は秩序と和樂の中心て、夫も子供も皆その心一つて美はしい光を與へらるべきてある。家庭での美の宗教の祭主、否女神は妻てある。この樣な家庭は光明を四方に放ち、又この家庭

で淨められ强められた男子の精神が、學術の上にも、市政の上にも國事の上にも非常の力である事はいふまでもなからう。

人生は個人が社會の一員として生活するので進み、人の心に美と愛との精神が充てば社會は即ち神の國となる。

九、社會の方面から見た美の宗教（下）

人間社會は努力の塲で、總て現在現實は不完全で尙改新進取して一層善良に至るべき豫程と見るを要する。人間は秩序と協同とで互に生存を助けて社會に依て理想に進むべきである。この理想は終には到達せらるべきであるが、その進歩は惡と鬪ふ事を要する。

吾々は物の美から進で、思想や行爲の美を愛育して、此の生活に美を齎らしたなら、その美は總て永久に社會に存續する。即ち社會の生活を完うする方は、美に養はれた愛の精神を貫いて、一已の利害は家の犧牲とし、一家のは之を社會、國家に捧げるにある。美を愛するといふのは社會的行爲で完うされるので、美を樂むといつて山林に隱遁したり、自分獨りて樂むだりするのは全く見當違である。人が

何物何事の中にも美と善とを發揮するには、第一に自分の心情の中の美を知り、進でその生活を外圍に調和し、高潔の思想と親切の心とで生活するを要する。

此く務めを盡すのは、即ち自分の性格を神に近けるにあつて、社會は同じ神の德を共に發揚し讃嘆する大團躰である。現代新敎キリスト敎の國では、往々人を自分だけしか考へぬ樣にする傾向が多いが、之に反して此の美の信仰では人が皆協心して愛の精神を捧げて同一の最高者を愛する。此の愛の精神は施療院や孤兒院などの慈善事業にも段々と現はれてをるが、又信仰を基にして人の墮落を救ひ、社會の惡習と闘ふ方にも發達してをる。此等の惡害は中々撲滅し難いが、忍耐と精進とが之に當る武器である。神の愛が易らない如く、吾々の愛も撓むではならぬ。此の精神で人を助け、人に業を與へ(業務があれば惡心も起り難い)又人に信仰の力を與へるが吾々の

義務で、此うして人を助けつつ自分自身の美德を發揚もし、自分の美で人をも感化誘導すべきである。

此等は皆愛一つで出來る。愛は最も實行し易い實行哲學で、此の哲學は人をして神に事へしむる敎である。人生の美を求め、地上の暗黑を愛の光明で照らし、惡と闘ひつつ善に進む。この暗黑や闘ひは人にとつてつらいが、このつらいのを排除して進む處に人生の莊嚴はある。或は何故に世界に惡があり、人に不善があるか、神が愛ならば何故に人生を始めから善美にしないかとの疑ひもあらうが、此の世一つで、狹い一生で全躰を判斷するのは愚であらう。今日の惡は即ち明日の善を作らしむる力であり、此の世の害毒は、彼岸の安養を求めしむる刺激でないと誰が斷言し得るか。

自らを犧牲にするのは社會生活の避け難い結果で、一體「文明」といふのは人が社會的となつて、家庭や、鄕黨や國民や、又好尙研究などの

上て各所屬の社會の中て愛の精神て協同する事に外ならぬ。此等の社會生活が人生の經緯てあつて、その中の錯雜な關係の間に圓滿に生活するのは、即ち人々各の中に潜むでをる、愛の美德を發揚する所以、即ち自分の德を他人の德と調和し又協心して進めるにある。

社會的生活は人體の色々の機關の協同調攝の如きもので、一社會の人が喜憂を一にし、趣味理想を一つにして進む。その中の一つが我儘をしてはならず、一つが他を壓迫しても行けず、各自ら自らの本分を盡す事に依て全體と共に又全體の爲めに働くべきである。他を損して自ら利するのは社會生存の第一の毒て、愛と美との宗教はこの調和の爲めに存する。

それ故社會の制度や國家の法律は人々に各その能を盡さしめ、又それて十分の愛を發揮して幸福ならしむるを目的とすべきである。美の宗教の戒條は、善良の制度、善良の法律、雄大の哲理、高尚な藝術、高

潔な文學、清淨の愛。此の標準を守つて實行的て進取的に進歩の導者になる國民は即ち文明の旗手てある。

今迄にも社會の幸福改善の爲めには色々の協同働作も起つて、而かも個人の自由を發展する樣にして來た。その爲めには勞働の神聖も唱へられた。勞働は總て富と文明との基て、人生の大法てある。學問が人の健康と力と美とを增進し、又自由と愛との基礎に立つて社會の難問を解釋した時、即ち人生の新紀元て、人生の勞働、快樂、愛情、信仰は人間を復活し、社會は共同して今までにない美を發揮する時であらう。

封建的產業に代つて工業の組織が起つた。現代の工業組織には色々の弊もあるが、協同組織を作り上げる點ては文明の組織て、その間の競爭も良く導けば、人間の力を開發する力であらう。工業と勞働とは美と愛との精神て貫けば活動と進歩との原動力である。

自由競爭は却て協同の母て、協同は同情、愛情、正義、眞理で完うせられる。人類といふ大社會はこの力で勤勉、忠實の男女に組織せられ、美の宗教に進むべきてある。

社會主義は單に社會を個人の利益の爲めに存生する者と見る故、個人と社會との相互の協同を解し得ない偏頗な機械的の見方である。此の關係を道德の上から愛の精神で解けば協同の眞義は現はれる。人は己れ一人て又一人の爲めに生存するのでなく、社會人類と共に、又その爲めに生存すると思へば、義務の觀念は强くなり、吾々は皆共に一つの大きな心の王國に入り得る。愛のみの社會になるまでには法律も必要て、それ迄は吾々は社會の惡と戰ひ、貧を助けて進まなければならぬ。家庭の中でも、朋友の間でも、市町村や國民の中でも、又人類といふ大社會の中でも、愛と美との神に事へ、自分先づその愛と美とを發揚して、その感化を四邊に及ぼし、衆と共に神の國

を迎へなければならぬ。

十、美の宗教と國民的生活

社會はその成り立ちから見ても亦發達から云つても一つの有機體で、その保存にも進歩にも責任を共にし、又從て理想を共にする團躰である。それ故協同は社會生活の第一義で、現代の樣に競爭のために協同を忘れ、愛の調和の反對に人と人と互に殺す(有形無形の手段で)如きは社會の自滅である。

今までに人類のなした進歩は壓制や獨占の賜でなくて、協同の結果である。宗派の上でも、政權の上でも、又經濟の上でも、壓制或は獨占の夢に驅られた人も多いが、近世になるに從て此の夢は消えつゝある。政權や王位のための戰爭は現に少くなり、工業經濟の上で獨占の弊は段々明かになつて來た。之に代はるものは愛の協同、精神の社會である。

宇宙人生の美を愛し、神を信ずる人は又その國を愛する。國の武力や有形の勝利を倨傲の種にする愛國者でなく、一國の安寧、人民の自由、社會の清潔の爲めに盡す愛國者は、國難に當て眞心國の爲めに身を殺す愛國者志士である。一國の秩序、幸福の爲めに內政の改良、政治の健全を愛護し、鄕黨町村の爲めには、その衛生や敎育や道德の爲めに奔走する人、此が眞の愛國者、善良の公民で、此の愛國の奉公は又人類に盡すの方法である。此の樣にして美の神の崇拜者は、又公民としての公生活の中に人生の美を增進して、この美を樂む衆と協同の生活を遂げる。即ち責任も衆と共なれば、信も愛も衆と共にして、國民全體が精神の愛に進むのがその理想である。

美といふのは何も外面や容貌の美ばかりでなく、道德上の美、心靈上の美が眞の美の源泉で、心の內の美は外貌にも現はれ、又周圍の天然を美にし、又その美の愛を人類協同の精神に發表しては、勇者も愛

國者も聖人もその中から出る。此等の偉人は皆その事情境遇に應じて美の愛を實行した人である。美を愛し、美の神を信ずる精神て見て來れば、何者もこの理想のために神聖になりこの理想を愛する精神は即ち健剛の性格となつて現はれる。性格は人の力、又人が社會を造り上げる根本で、親が子を敎へるにも、師が弟子を率ひるにも皆性格の發育を目的にしなければならぬ。而して性格の人は自ら制し、自ら捧げて神の爲めにする人てある。

愛國の事について一つ特に云ひたいのは、人はその國の爲めに死ぬるのみが愛國てなく、國の爲めに生きなければならぬ。國の爲めに生きて公民の義務を盡し、社會の改善を計つて、政治にも敎育にも又宗敎にも、自由と愛との發達を計る、此が生きて盡す愛國である。

國民の生活は單に物質上の繁榮を目的とするのてなく、神聖の目的、精神上の愛で最高の理想に進むにある。人は只身躰を安樂にし

て、心に安慰を得るものてない。此の世の光榮を作り上げるのは即ち天上の光榮で、神の愛が天上て成就する如く地上に現はれるを期して、心は始めて永遠の光榮に觸れ、永遠の生命に進み得る。それ故に心の中には無盡の源泉が湧いて、その力は能く總て社會の惡弊を救ひ、又人の心の汚穢を洗ひ去ると覺悟して、常に精進するが精神の力てある。

一國民の光榮は地上の力を現はすばかりてなく、又その中の卑賤のものにも滿足、精神の圓滿を與へるにある。不幸にして、世は尙有形の富を目的にして、富の爲めに相嫉妬したり互に排斥してをるが、此の目的は失望に終るに違ひない。富を目的にする人は奢侈の快樂を夢みて居やうが、富を得る爲めに心が動搖するばかりて、圓滿の滿足は少しも得られず、傲奢の生活は之を得たにしても、その榮華の花影には常に惡德の毒蛇が現はれる。

人の世に快樂は傲奢、華麗にあるのでなく、却て何でもない簡單な事の中にあり、人の品性はその性格の氣高さにある。この性格があれば、貧民でも富み得る。人生は今現に吾々が見て居る以上に亘つて、宏大な永遠な生命の一部分をなしてをるので、一個人の生命はその斷片に過ぎない。現在の生命は成就したものでなくて豫備、終局でなくて道行き、充實でなくて發達てある。然しながら人は生滅の斷片の中に永遠の生命に參與し得、現實の中に彼岸に進み、終局を望み得る。それ故富みとか貧とかいふ事は又終局の事でない。社會の理想は人に總ての私情がなくなつて、皆が調和の愛に入り得た時にある。人が各少しでも誘惑には勝ち、少しでも愛を行ひ、一分でも理想に進めば、それだけ人間の進歩は增したので、人々の愛が相合して生命を豐富にし、性格を高尙にしつつある。個人の性格が發揮せられて、それが相合して社會的に精神的生活を豐富にする、此處に人

生の理想がある。

進歩の途上には不圓滿もあらう。が、この不圓滿は、吾々をして益す自分なり他人なりの缺點を改めしむる動機で、罪惡は人生を瓦解するが、罪惡の心を改めて吾々は社會の圓滿に進み得る。而して美なる神の靈を常に眼前に置き、又人に示すのが、社會を高めて人をして神の中に生活せしむる所以てある。汝の父の完きが如くなつて、人と共に進む、其處に黃金時代の曙光が見える。

人と同じく國家の理想は初めは權力てあり、今は富にあるが、此が文明を理想とする樣になるを要する。

學問ても、星學は無限の空間を、地質は時の無限を吾々に示してくれ、進化の理は有機體が外圍に適應して、內に力を開發する眞理を敎へる。此の無限の空處の中に、無限の時を經て生物が進化して生存を發達するといふ事實は、吾々の向上の道を示してをる。此を大き

く見れば、世界全體が進化しつゝある有機體で、美の宏大な設計がその中に現はれつゝある。人は之を生存競爭といふが、その競爭は完全なもの、美はしいものを生ずる方法で、惡害と鬪ふのが、即ち進化で、この進化の競爭は萬有の中の美と調和とを開發する所以である。

吾々の心は只思想や知識を開發するばかりでなく、心靈の調和で大きな同情即ち愛を開發する。同情はマグネットの如く何物をも引きつけて、吾々の心はその力で、他人の幸福を自分に感じ、自分のを人に頒ち與へる。

文明といふのは、先に云つた如く、私情を去つて大きな協同の生活を開發するにあつて、自由といふのは、互に調和して自らを制限するにある。此の樣な文明社會では、貧い者も弱い者もその道德で富み且つ高い方に進み得る。

神を愛する精神は吾々の天性故、それを擴充すれば他人の心に同

じ愛を開發する事が出來、此の力で人の心に力と望みとが出來、個人も社會も同じく協同の理想に生活し得る。此の生活の曙には望みの明星が輝き、私情の暗黑を驅逐し、この社會の春には和風が吹いて、嫉妬や排擠の氷を解かす。

愛は變化せず、滅亡せず、神聖で廣遠で、永遠に總てを征服する。愛の信仰は、その慰安の風で憂愁の黑雲を拂ひ、過去の辛苦や痛心を、眼前に髣髴する愉悅の希望で夢の如く消し、吾々の心は愛の曲で神の美を讃美して、天地萬有と共に大天樂を合奏する。

此の愛の精神は國と國とを和して人類同胞の實を擧げしめる基。正義と名分とは此の愛に融和せられて、世界の國々は共に永遠の律呂を奏する。此になれば、この世は久遠の神壇で、人生は神に事へる司祭となる。

十一、宇宙は美を目的とした意匠

簡明に宇宙の組織を考へて見ると、宇宙は神といふ藝術家が案出し又作り出した藝術の作品といふ外ない。人の心には美を樂む天性があるが、其方から見て抽象的につゞめて云ふと、宇宙は美の實に現はれたものである。この眞理は知の方から見ても同じと信ずる。

哲學で宇宙を色々に見るが、どうしても許さなければならぬのは、そが存在するといふ事實である。存在といふ事を第一に許して、それからそれを美として見ると、三つの方面がある。

第一には法(或は道)といふ一定の規律に從て存在する事。

第二には此の法(或は諸法)は或る終局目的の爲めに働いてをる事。

第三には此の法(或は諸法)はそれ自らの本性に從て必然の根底に出てをる事。

言ひ換へると、宇宙の作者はその本性に總ての美を實にしてをるから、其の作品である宇宙は美を開發し、又美を包括する爲めに出來てをるといふにある。宇宙の中に物や人はその生存の範圍と力量とに應じて、宇宙の根にある神の美を自分に取り入れ、又映じ出し、開發するのは、即ち神を己れで代表し體現してをるので、何物も神の美を反復するために存在してをる。

進で尙此の點を述べて見たい。

實有を研究して見ると、人間の心は存在と知と行とを兼ねてをる如く、哲學の職は天然や科學や又藝術の原理と關係と目的とを研究するにある。存在と知と行との三つは哲學の三方面である。

第一の存在は意識が之を代表して、其中には、主觀と客觀と超絶との三つが含まれる。第二の知は理解で、理性が判斷をし、想像が觀念で働き、記憶が知覺を蓄へるのがその內容。第三の行は意志に出て、

運動や感動や動機がその働きてある。

目的の哲學は善、眞、美の事實に現はれるのを研究するので、之を藝術として云へば、善は道德の術、眞は實行の術、美は美術である。

道德の術は又倫理といつて、知のあるものが道德實行の上で相關係する仕方で、人が人として又社會や國家の一員としての行爲を本にして、それから宗教に進んで人間の最高の理想である神靈に對する關係を含むで來る。

實行の術と名けたのは、人間が科學の進歩や醫學の方法で天然力を利用して人間の生活を幸福にし、文明を進歩する方面である。十九世紀までに學術が色々の發見をし、驚くべき眞理を闡明して、事物の奥祕を探り、又之を人の生活に應用し來つた事は多いが、此等の發明は今まだ其の初歩にある。火の發明、水や風の利用、電氣の發見などは皆物質上の事であるが、この進歩の原動力と行先とは又知の上

にも道德にも宗教にも藝術にも深い關係を有つてをつて、要するに人の心靈の力が物質の關係を所緣にして發展したのである。

美の術は即ち美學の題目で、此藝術は、人が調和を好み美を愛する精神の現はれである。眞を愛する精神が科學の元になり、美が美術に現はれる。人の心が人生や天然の中に美を求め、美を愛するのは、無限の美に含まれてをる無限の愛と智慧との一分を現はすもので、神の智慧は特に美と現はれて人の直觀に訴へる。それ故美術は個人にとつても、家庭にも社會にも普かるべき使命を有する。

人の天性が道德や實行や美の藝術に依つてその天眞を發揮し、宇宙を完全美妙の發表と見るのが「目的の哲學」。それが此等の藝術で事實となり、又人生は其等の力で多幸多福となる。

物が存在するには、存在の目的があり、目的に從て機械的、化學的、有機的、生物、有情、知力など高下の列があつて、その進歩の跡は神の智慧

を代表する。此の進歩が美の開展に必要てある以上は、又そこに進歩の階段に從て不完全も存在する。

人生は圓滿てないと云ても、進歩は常に圓滿の調和に進みつつある。人の同情はこの調和の首尾を貫いた力て、人生は此によつて多趣の中に統一を得、最も高く最も複雜な圓滿に進む。

この進歩の理想は、觀念の中ては既成の事實として神の智慧の中に含まれてをるが、それが世界の事實となるのは段を追ふての進化にあつて、進化の實は人が宇宙の內容、神の智慧の設計に應じて之を意識し之を實行するに現はれる。神靈は此の智慧の源泉、即ち實在て宇宙はその智慧を現はす意力の現はれ。萬物の間に調和は增進して、不調和は陶汰せられ、色々の動作が合併して一つの終局目的に進み、此の樣にして卑いから高い方に上るが即ち美と善との階段。

此の進化の進み行きとその結果を見ると、其中に吾々の智慧に似

て而かもそれよりも無限に雄大なものゝ存在するを見ずには濟まない。吾々は人間であるから何事を見るも人間の眼て見るが、人間の眼て見ても、宇宙は生命あり智慧ある有機物てある。況や神から見れば、その有機體の設計は如何に宏大てあらう。

吾々人間は此の大生命の一部で、吾々の人格はこの大有機體の生活と離れ難いもの故、この大生命の一切統一が永遠てある限り、吾々も亦不滅てある。身體の生命は死ねば亡くなる樣に見えるが、その實吾々の生命は一微塵も之が爲めに亡ぼされない。吾々は死を畏るるを要しない。今呼吸してをる空氣も不滅てないか。吾々はその身體の生命ばかりを命と頼み、現前の世界を唯一の世界の樣に思ふが、その實萬有は實在の片影て、吾々が五官て感じてをるのは實在が感覺に入り得る一面に過ぎない。知覺の發達や學問の力て吾々の見る現實世界は常に擴張してをる。然らば愛の眼て神の智慧神

の光榮を眺めて見る樣になれば、世界といひ人生といふものも、その範圍が大くなるのみならず、その意味内容に至大の變化を生ずるのは必然でないか。現在の生命は大生命の一面又一部分で、科學の力も十分に實在の蘊奥を極め難いとすれば、吾々は愛の力で、此の世の生活を透して神を見なければならぬ。宇宙は一つ、實在は一つ、生命は一つ、皆神の愛である、又智慧である。一であるから絶待で不滅、又不生である。星雲から人間に至るまで、總の物は皆この一つの分化した現はれに外ならぬ。云はゞ宇宙は神が自らで自らを制限した現はれである。

萬物を見ると、簡單から複雜に、微弱で又曖昧な狀態から力のある明智に進むで、何れの物、何れの狀態もそれより下のに比べると一つ目的を達したのであるが、それより上のに對しては手段となる。因果交錯し、優劣進化して、手段と目的とが互に目的ともなり、手段とも

なつて、秩序整然として進むのが即ち進化である。

吾々は科學などの色々の方便で、宇宙の進化を下へも上へも觀察して、その法を發見し得るが、それは實在を極めた者でなく、吾々の思想の屆く限は神の一部一面に過ぎない。神の意匠が物質の塊から進て人間の精神に現はれてをるのを見ると、その意匠の宏大な事を知り、又吾々の精神には神の精神が反映して、その中に不滅の姿、美の愛を發表し得る事は、吾々の光榮と云はなければならぬ。美の方に進みつゝある神聖の心は、即ち人間に現はれて、世間の美はその靈に寫し取られる。さすれば人の靈は神靈の全躰でなくとも、世界の花といふべきであらう。

然し人間の心に映ずる世界の外に、上にも下にも美の爲めに又美に作られた色々の世界があつて、此等全躰を觀取して初めて神靈の美は十分に現はれる。吾々は其の色々の世界の一小部分、一斷片を

見得るのみても、而かも尚その美を幾分かでも想像し得る點から見れば、愈宏大な神靈の意匠を信ぜざるを得ない。

現實以上の世界に對しては、吾々は直接に之を知覺する力を持たぬが、其の大躰は幾分か之を想像し得る。所謂る「後如何になるべきかは未だ現はれず、されどその時は吾等神に似ん事を知る。」ダンテの見た天上の光榮、佛陀や印度の聖者等が三昧の中に觀取し得るといふ彼岸の光明、此等はその儘に彼岸の相でないかも知れぬが、吾々は幾分か之を想見し又渇仰し得る。その彼岸は即ち吾々の行く先き、否家郷で、それは無限の開發し得る寶庫である。吾々はこの不滅の家郷に入つて始めて神靈の圓滿な美を十分に觀得るであらう。

十二、實在と人格の完成

宇宙の現象を段々詮じ詰めると、最後には實在が横はつて、それが時と處とて働いてをるのを見る。實在は愛と美と喜との三つを一つにした生命で、此の唯一の神靈は個人の中に各々現はれる。この實在が客觀の世界と現はれるには、處、時、實質、形式、力、精神と靈魂との七つの形式で、此等が調攝して交渉すると、生命のある美はしい宇宙をなす。此等の中の或るものだけを抽いて、それで宇宙を觀るのは抽象の思想で、眞の活きた宇宙を觀る方法でない。

此等の或るものが別に存在して、プラトーンの觀念の樣にそれ自身の生存を有つてをる事はあり得ないのではなく、又或は他界にはあらうが、地上の現世には存しない。この現象世界を吾々の心に映すと、どうしてもこの七つに攝して見る外ない。

人類の生命にはこの調和が最もよく現はれて、其中には精靈世界の事物がおぼろげに見え、人の發達と融化とは宇宙の設計を代表してをる。即ち人類は神の美の面影で、その智慧から出た行ひや又は力や愛の發現の中には無限圓滿の美がちら〳〵と見え、終には神と一つになるべき萠芽はこの中に含まれてをる。

人間の生存は人と人との間、又內と外との事情が相競ひ相助けて、その調攝協同の間に進化の實を擧げて、圓滿の美に進むので、無數の人は即ち各この生命の一中心點をなして、それが相和して進む。此の一つ一つの中心は各その中に知の光りを貯へて、その開發に從つて形と力とに現はれ、內にある向上心と外部の事情とに應じて開發する。而して此等の個人は各その知力の程度や道德の理想に從つて實在を見、その眞善美に向て進む直觀の力を持つてをる。

こうして見ると一個人の小宇宙の中にも雄大な設計意匠がこも

つてをり、美はしい調和が現はれると同じく、天然の大宇宙も亦同一の意匠、同一の調和で出來て、大小相映じて進化向上する。此の進化の中で、結果が光の煥發する樣に開發する一面と、原因が其の中心に集中する融化の一面とがあつて、一方では始終新結果を開發して益す善の方に進み、他方では其の力を根元に融合して意匠、力量の根本と相呼應する。根本に歸つて其光に接し、その意匠を見て、光の源であり意匠の作者である神の靈を呼吸しなければ、開發は盲進となる。人の進歩は一方では開發であるが、それと同時に他方では還源である。前途に段々顯露する理想の目的に進むのが吾々の完全になる道で、この道は無限である。破壞と見え、死として悲まれる事もこの道の一つ。宇宙には無盡の諸法がその豐かな內容を美はしう現はして、その根源に含蓄してをる統一の協同を段々に發掘し煥發して進みつゝある。人間はこの理想を見て進むばかりでなく、又中に潛

むてをる神靈に着目して、その愛に接し、その力を體現する故、人間の中には外に向ひ前に進ては開發があり、それと共に還源の歸入が行はれる。即ち人間自らの意識の中には神の意識が現はれ、向上の理想の中には已に本來の觀念が働いて、久遠の神も將來の樂園もその中に見える。根本と目的とが一々の活動て活現し、過去の久遠も將來の久遠も現在の美として、此の一心に映ずる。

宇宙の秩序は唯一の神の心靈が其の中に在るのを示し、この美はしい世界はこの神の形や性格の活動で、一人〳〵の心はこの大心靈の一面である。宇宙は神の現はれてあるが、宇宙その者が神でなく、それを超えて嚴在する神が萬法の中に秩序として現はれたのてある。神は宇宙萬法の中に含蓄せられてをるが、萬法が直に神ではない。即ち美として宇宙を見、美の靈として神を見ると、吾々の信仰は萬有神敎に走らないてどこまでも美の根本てある神の靈を萬法以

上の靈格と見なければならぬ。この靈格が人に現はれては人格となり、萬物の中にはその力となり、そういふ樣にして、神は宇宙人生の中に現前に顯はれ、總ての生命と生存との中心となつてをる。神は吾々の中にもあるが、外にも、又萬法以上にも存する。唯一の靈が一切萬法に普遍して、恰も元は一つの太陽の光が、その照らす者に應じてその色を放ち、而かも光は元の儘に炳然としてをる樣に、何物の生命も皆元の一つの生命を得て生存するのてある。宇宙は一つ、而してその萬象の上には唯一の實在がある。この實在が即ち秩序を繪道する智慧、生命を實現する力。

此の樣にして天然が宏遠の進歩を遂げる最後の目的は人格を生ずるにある。人格の中には精神が變遷しつゝ現はれ、心の中に潜むてをる無限の生命が段々開發して、行く先には圓滿の美を示してをる。心の內のこの寶があるから、人類の人格は神靈の反映で、この世

の生活では人の人格は尙弱くとも、次の世では不滅の靈となり得る。人格が不滅の實を現はした時は即ち、神の美が吾々に現はれた時で、神の圓滿が即ち吾々のものになる。

眞の人格は神靈が自らの中にあるのを悟る自覺の生活で、又神の性質性格の中に入つて神に似る生命である。この人格の根底には三つの自覺がある。神を悟る自覺は其第一で、吾々の實現はまだ十分に神に到らずとも、神と一つだといふ自覺は人格の最大の力である。次に天然と人類とを自分の中に發見する自覺で、吾々は萬有の調和協同の中に生き、主觀の意識で我れ自らを知る。（後章、「我れとは何ぞや」參照）

人格は此等の意識生活の集中點で、吾々の眞の我れ、眞の人格は即ち吾々の中にある神靈。其の神靈は人格に集まつて他の人や物と相反映し感化する事は、神が宇宙の生命の中心であるに異ならぬ。この有限の生命に宿るものとしては、人の生命は小い又はかない樣

であるが、之を精神の方から見ると、其の中に人間の偉大な生命がある。內にある人格は外に對しては性格として現はれ、內外共に有限以上の根底もあれば又力を現はし得る。神が人格を具へるといふのは、即ち神が一切人格の根底で、有限を超えた智慧の力で一切萬物を慈む愛を行つてをる事を指す。それ故眞の圓滿な人格は神のみに具はつて、個人の人格は各その資性に應じてそれに似た人格を具へ又發達するのみである。吾々人間の人格には色々の制限があるが、神の人格即ち神靈は物質の制限を受けずに自由にその智慧を發表する。人の人格はこの最大の人格を分けてもらつてその伴侶となつてをるので、それが十分に神と合一するに至つて始めて圓滿の人格を得たといひ得る。神と合するといふのはそれを愛する事で、愛が大く又强ければ、それだけ神の意識に近くなり、その愛が萬物を包括する樣になれば、それだけ萬物の元である神と生命を共にする

樣になる。人の愛、天然の愛、皆是れ神の愛の一部分である。

人が神に合一しても、その人格が亡くなる事はなく、却て眞の人格を得る。即ち人間性は神との合一の妨害でなくて、只人と人と彼れと我との間の隔をつけるのが神に遠かる惡德である。君の佛敎で無我の敎のあるのも、この意味ではなからうか。神に近くに從て吾々は自分の生命の源に近いて、自分自身の中に神を、神の中に自身を置いて、その愛の意識の力で不滅を得る。

神は個人の生命以上に超越してをる故、吾々から見れば直に現實になつて居ない觀念、又目ざす理想であるが、其個人の一定の生命、萬物の秩序は皆神の愛である故、この觀念が直に實在である。無盡の意匠、自在の知慧で明瞭に確定した觀念を作り出し、萬物に理想の根據を與へ、而して雄大の材料、無礙の意力でこの觀念を實質に作り出たす神を、圓滿の人格といはずに何といふべきか。吾々の中にある

知慧は此の大光明の一映射、吾々の力はこの神力海の一波瀾。その一映射が根元の光を慕ひ、この一波瀾が普遍の水で動くのが、即ち吾れの神に對する愛で、光は光と色は色と相映じ、水と水と波と波と相和するのが即ち人と人との愛。吾々の人格は個人特立して立ち得るものでない以上は、一切の人格の大根元を神靈の大人格に歸すべきは自明である。但しこの大人格は吾々の樣に生滅しない、生滅以上、不生不滅の人格である。神の人格は第一に宇宙の統一で證明せられ、次には宇宙の生命を貫いてをる愛で明白に見える。

吾々の心が人を愛し、天然を樂み、善に向ひ、美に赴くのは、神靈の反映でなくて何物であらう。若し神靈に人格がなく、從て智慧や愛がなくば、人の愛も空夢、天然の美も空華に過ぎない。吾々の宗敎は人の心と相呼應して、一つ一つの渴仰に答へ、一々の愛に酬ふてくれる絕大の人格を中心とする。

神と相對すれば人間は微少で大空の一塵であるが、その一塵の中に無限が含まれてをる。この無限を自らの中に開發するのが、人生の天職で、人間の不滅はその小い人格の中に神靈を開發し、小い人格から個人人格以上の人格に進むにある。

人はその、根元の人格を意識しては、之に依信し、之を渴仰し之を愛する。依信、渴仰、愛情は生滅の人生に現はれる不滅の光りで、その終局は最高の人格に到達して神靈を實にするに至らずば止まない。愛は此の永遠の生命の源である。

今自身は病の床に臥して死に瀕してをるから、特に死といふ事を考へるが、又恐らくは多數の人も一旦死といふ問題に觸れると、何故に此の世に死といふ者があるかと疑ふに違ひない。自分はこの不滅の人格を信ずるお蔭で、死を畏れるとか、死の意義を疑ふとかいふ事を少しもしない。生命が神に合一する進歩である以上は、又進歩

は變遷で出來る限りは、その變遷が生死となつて現はれるのは少しも訝るに及ばぬ。一定の理想に進む運動、動作は生死の中に無窮に進む。吾々の心は無限の人格を慕ふ、慕つてその心と直接に接しやうとする。接しやうとする以上は個々別々の生存の中にもその孤立の態度を捨てゝ愛の融合に入らうとする。愛の融合の爲めに生死は必要である。死は不死の門である。

宇宙は活物で、その萬法が各自分の中に神靈の愛を發揮する。神靈の愛が已れの心に輝き始めた人には、有限の生命以上の光榮が見え初め、滿身の喜びを以てそれに向つて進む。生の中にもこの光榮はあり、死にもこの喜びはある。

十三、微細の物に現はれる美

肉眼で見えるばかりが世界でない。非常に力の強い顯微鏡で始めて見える世界がある事は誰れも知つて居やう。この別世界は眼を標準にすれば別世界ではあるが、心の眼で見れば、見える世界と同じ形と實質と力とが時と處の中に動いて、同じ數理、生理の關係で活きてをるのである。その中には活きた構造の驚くべき美があり、調和があり、微細の微細に入つても美の生命は變はる事はない。

啻に形や構造の美ばかりでなく、其の生活は身體も心も高等の生物と同種類で、人間と同じく生死もあれば生殖もする。顯微鏡下の生物は感じもすれば愛情もあり憎みもすれば喜びもし、欲する所を追ふて幸福を求める。小な細胞一つの中にも生命の活氣は見え、それが集つては社會を作り協同し調和してをる。それより進で今日

の顯微鏡にも見えないイーサーの世界に入つても關係は異なる事はなからう。

顯微鏡下の微細生物を見ると複雜の中の統一がその色々の組織や働きに現はれて、中には自分の生命を營み、外には四圍の境遇に應ずる有樣は、高等の生物や、人類社會の生命や心に異なる事はない。この萠芽の中に高く進んだ生命の基は十分に具はつてをる。生命は萬物を通じて一つである。

細胞は一つ〳〵各その生命を營むでをる故、その生命の中には人間の色々の活動の片影を見得る。細胞は自らの生を維持し開展するばかりでなく、その開展の間には、人間の化學者の樣に香料や色素や砂糖などを作り、人間の藝術家の樣に調和も具はり、雅致も壯大も十分に具はつた作品を作り、又虹にも比べ得る色を發するかと思へば、あらゆる曲線の美を具えてをる。

此の樣に細胞は又相集つて社會を作り、協同と制限とで集合の生活を營む。天を突く松柏の形も、纖細絹にも優る花瓣も皆此細胞の社會で、薔薇の香、野百合の色、さては希臘人の隆準の鼻、南歐婦人の愛らしい目つき、一つとしてこの細胞の社會性を遺傳し且つ發展しないものはない。ショペンハウエルは此等の色々の生物を各その生活の方法や形體に現はれてをる意志の發現と見たが、吾々は此の意志の中に神の意志を見、その發現の中に進歩の意匠を見得る。同じ哲學者がこの意志を打ち消すのを理想としたのは、この意志を一貫した大きな愛の生命を見得なかつた爲めである。

顯微鏡に見える細生物、望遠境に映ずる宇宙の生活、何れも活きて美はしい。細胞の中に現はれてをる調和は又星の世界にも見えて、其中の物質の一分子も大きな秩序の一部分となつて活きて居ないものはない。物質論者から云ふと、此等の運動を單に機械的に説明

し得るてあらうが、その機械的といふ中に萬有一貫の生命はないか。同じ物理の事實も、數理の關係も、或は又化學や生物の事實も物質として見れば機械的であるといつても、その機械的の調和は何に基くか、又その秩序は誰に作られたか。物質の中にもそれに固有な必至の生命があり、この生命は人間の精神にも取り入れられる點から見れば、物質で精神を説明するのと、精神で物質を説明するのと、何れを偏して捨てる事は出來ない。機械的の關係でもその中に美はある。美があつて吾々がそれを觀得るならば、その美は人間の生命や社會の生活の中に現はれる美と全く別物であり得やうか。そこに進歩があり秩序があれば、進歩の路を進む意力、秩序を愛する愛情でその物を觀るに何の差支があらう。物質も秩序の支配を免れ得ない以上は、秩序の意匠の中で存在してをるので、吾々と同じく神の意匠と愛情の發表である。

然し吾々は見える世界、觸れられる物質のみで生活して居ない。吾々の生命の精が基く所、美の發源である世界は、細胞が顯微鏡に見え、星雲が望遠鏡に映ずる樣に、心の眼に見えなければならぬ。吾々の生命が物質を基にして來た如く、進では精氣の中に入り、動物の進化で人間が出來た如く、人間の進化は美と圓滿との超越界に進むに違ひない。その超越界では物質の機械的關係は觀念の理想的關係になり、生滅の現象は即ち不滅の實在になる。

細胞から星界に至るまで、宇宙は生命の進みで、その生命組織は反應、協同、調和で各その中心を作つて、その中心に應じて感じや思や又渴仰や愛情を發表してをる。而して又その中には各無限に進む力を蓄へて、その現狀ばかりでなく、その理想で神を示現する。即ちこの意味から云へば、宇宙は一つの活物で、それを一貫した心が色々の形でその中に現はれてをるのである。

吾々の心はこの心の一部が人間といふ生物の身躰に活現したので、生理といふ制限の中に肉に化した神靈である。身躰が心を作るのでなく、心が肉躰に現はれて、その中で無限を愛し神靈を意識する。この意識の中にその本來の光明が表はれ、その愛情の中に遍滿の人格が働く。

美は即ちこの心の中にある觀念が外界の根抵になつてをる觀念と相應じて覺知せられるので、その愛は人を喜ばせ、人を高めて神靈に向はしめる。

神は一つ、それが色々の人格に現はれて萬有の美を成す。神の生命は宇宙に遍滿して顯微鏡の下にも望遠鏡の中にも動き、美と進歩と調和とを至る所に見せる。見える物も見えない世界も皆神靈の現はれとすれば、又吾々の心が多少でもこの神靈を至る所に發見してそれを愛し得るとすれば、吾々が神を愛してその靈を呼吸する其

の愛の世界には即ち神の生命が活躍してをるのである。

十四、美の神に至るまでの神の諸方面

人間の精神がその發達の間に如何に色々の神を見たか、而して又それが終に美の神に結合せれるるか。君が曾て云はれた神人の宗教は固より宗教の極致であるが、その神人が指し示す神その者は終に美の神であるべきかと考へる。

大抵に云へば、神を見るに(一)宇宙全躰として見る、(二)多數と見る、(三)一つと見るの三つの方面があつてそれが又色々になる。

(一)初めのはストア哲學や君の國に行はれる一部の佛教の樣に神を萬有又は宇宙と見る、即ち萬有神教。

(二)その次には二つあつて色々獨立の神を見て、まだその統一を知らないもの、即ちアッシリヤの宗教の如き多神教。

(三)第三には色々あつて、

(a) 多數の中にも統一が出來て、數多の中に中心の一つの神を見る。印度のヱダの宗教の如き單一神教。

(b) 唯一の神を人格と見る唯一神教。

(c) 唯一神教の中で特に神を王或は判官と見る。猶太教や回教。

(d) 特にそれを父とする。基督教。

(e) その父の愛に重をおいて愛と美との神とする。美の宗教。

宗教は色々あり、神を崇拜する方面が相異るが、自分は信ずるそのいづれも皆美の宗教に來るべきもので、又美の宗教の中に調攝し得る。

宗教が何であるといふ(云はゞ定義)考へは、宗教の種類程度に從て違つてをるが、美の方面から云へば、又何れの宗教をも包括して云へば、人が宇宙の源泉を考へ、それとの關係を定める所に宗教がある。

宇宙の中に含まれてをる目的、意匠、秩序に何か一つの源泉があるべきとすれば、吾々は宇宙を通してその源泉に接し、終にはそれと融合する。その理想に到らうとする態度に宗教の信は現はれる。

猶太人、特にその豫言者の信仰は、神に接するのに色々の外形を借りないで、道德の中に直に神に交るを吾々に教へた。道德を基にした神國のこの理想は外形に迷つた人類にとつて一大光明である。波斯のザラトシトラの教も亦同樣の莊嚴の眞理を傳へたが、只善に對する惡の觀念が猶太人に比して強すぎた。

希臘人はこの猶太人の道德を補つて、主として知力觀念の方、即ち美の方から神を見た。彼等は、美は神にあつても人にあつても同じく最高の德として、この德で宇宙の源泉と親愛の態度で接しやうとした。美と調節とは希臘人の心に皷動し、又天然に振動してをる音律で、大空も碧海も、星の光も人躰の美も皆此の美が形に表はれたも

のである。何物の中にも生を樂む喜悅の情があり、人生は大きな愛と喜びとで出來てをる。彼等の美術も政治も皆この精神の結果である。

古代の人も宇宙に發現してをる秩序法則の不變な事を見たばかりでなく、それが智慧で支配せられ、力で動かされるのを見て、或は猶太人の如く、それを有力の王が作つたとも見、又希臘人の如くにその力の微妙な働きを美とも見たのである。

特に東洋では一般に王政が行はれてをつたから、この智慧と力との源泉を有力な支配者、賢明な判官と見て、その王者判官は全能力を持つと考へたので、猶太人の唯一神教はその代表といつてもよい。宗教の中で權威といふ思想は此に十分の根據を据えた。希臘人の美觀には此の權威がなく、猶太人の道德には美の愛を缺いてをる。二者は恰も相補ふて統一に向ふべき位置を占めてをつた。

權威の觀念は又他の方面で犧牲といふ考を伴つて、茲に宇宙を償ひの場處、滅罪の舞臺と見る雄大な献身の宗教に基を開いた。萬物は互に他の爲めに自己を犧牲にし、人間も同じく互の献身で宇宙の調和を遂げる。此の點から云へば、犧牲といふ觀念は美の宗教の至要の要素ではあるが、猶太や東洋では此の觀念を一定の司祭組織に結び付けて、徒に償ひや贖罪の實行を嚴密な形式に作り上げた爲め、人間世界に悲慘の觀念を高め、無告の民に慰藉を與へ得ない樣になつた。猶太の宗教に、血腥ひ贖罪の觀念が多すぎるのは、美の宗教から見れば、殘忍と云はなければならぬ。

然し今日の吾々の信仰は此等の色々の見方を超えて、而かもその精神の心髓を統一して茲に愛の宗教を得たのである。宇宙の大調和は生命の充ちた有機躰で、その有機躰の生命は人々の心情の融合、社會生活の幸福で進んで行くと共に、又その調和を害する私情や惡

徳と闘つて行く健闘をも必要とする。而してその生命は人類から進んで、見えない靈の世界に擴がり、美の神の大宮を理想とする。吾々の心が美に憧がれ、神を渇仰するのは即ちこの靈界の琴線に觸れて、同じ音律で神の讃美の大音樂を奏するのである。

美と愛との圓滿に向つて進むのには、人界から靈界に進んで、段々高く、段々現世以上に愛の生命を營み、美の道交を結ぶにある。その間には喜悅は益す加はり、美を觀る事は益す明かに又光榮は增す。然し此の進歩は單に喜びばかりでなく、進めば進む程、それより下の精神に對する憐愍、慈悲は加はつて、喜と共に悲みは加はり、この悲みは又喜びを增す力となる。それ故、その最高終局の理想である神自身は高く超然として世を瞰下する尊嚴一方の神でなく、最も低く最も憐れな者をも世話してやつて、慈悲の情は何れの生物の慈悲よりも大く弘い慈悲の神。何れの人の心の悲みもこの神に感ぜられ、同

情せられない事はなく、憐れは悲みの多いに從て加はる。我々の心の中の一喜一憂皆神の同情の中にあつて、吾々の胸は神の胸と始終呼吸相應ずる。此の大慈悲の親に親しく接して、喜びにも感謝の涙、悲みにも感謝の涙を注ぎ得る信仰は、美の極、愛の極でなからうか。

今まで色々の祖宗は各その方面から神を吾々に示してくれた。孔子の道德、天命の敎、ザラトシトラの正善、光明、淸淨の力、モセスの法律、モハンメッドの唯一神、佛陀の離脫、キリストの親子の愛。皆何れとして神の理想でないものはない。が此等の統一は美と愛とに歸する。吾々は賢明な知慧の神、雄大な意匠意力の神、永遠な慈悲愛情の神、此處に古聖人の示してくれた宗敎の心髓と精華とを見る。何れの聖人も、その時と民との必要に應じた敎訓光明の中に神を示して、それに依て永遠の眞理を各その方面で代表した。吾々の勉むべきは、總ての聖人の精神の粹、永遠の福音を捕へて、之を美の神に統一

するにあらう。

十五、神の遍滿含蓄

通常宇宙は神に支配せられるといふが、之を又他方から見ると、神は宇宙に含蓄せられてをるといひ得る。神は創造主として萬物の外に立つのでなく、その中に、特にその中心精髓にあつてその妙用を呈するので、萬物はその周圍の外面である。何物の中にも特有の性能が固有にあり、その十分の開發は外から與へられないで、内から出る。この消息を見ると神の含蓄といふ事は一層明かであらう。明白な例を執つて云へば、鑛物が結晶するその性情は云ふまでもなく、その形も、その物の中から出る力で、他の何物も之を作り出し、又は變更する事は出來ない。前に云つた微細微妙な細胞の生活になれば、この理は一層明かで、溫度なり水なり養分なりはその生活の必要條件ではあるが、それ等の事情條件が細胞の生活を作るのでなく、自分

自らの中から出る力で生命は開發し發展する。此の樣な含蓄が形に顯はれるのを、神の智慧から出た法、理、調和の化現といふは不當てない。

此の點から云へば、萬物の變遷形式は、活きた數學、活きた生理て、神の智慧にある數理が形や數に現はれて、又我々に數の關係を示し、神の力に出來た生理が生命の事實に現じて、我々に生理の法則を發見せしめる。數理として云へば、小な電子や分子から地球天躰の大に至るまて、細胞や原虫から人間に至るまて、皆數の關係て出來てをる大機關大裝置てある。然し此の數理は只形と數學だけてなく、同時に生命の秩序法則てある。此の點から云へば、岩石も土砂も、太陽系も星雲も皆活物てある。生命は發展と還源との大方程式て、その方程式の一分子が各現はれて萬象となるのてあり、又總て機械的の力の關係は生命發展の方式、愛と美との形てある。

物質といふのは廣さのある方から宇宙の生命を見たのて、その立法は神の數學にあり、人間の數學はその寫し。數限りない星の運行は三角法や解析幾何の式で出來、風の微動一つも彈力と重力との力學的關係に支配せられて、總て物質は數の法に動いてをる。その法は紙上の數字や方程式だけの法でなく、活きた神の智慧から出た嚴密な又賢明な立法。宇宙はこの統一ある立法の發表する所てある。數の關係から進んて、化學といひ生理といふも、此に異なる事はない。

科學は即ち神の智慧を人間の智慧に翻譯したものて、その結果は一つとして萬有の統一を證明しない者はない。現はれは無限無數てあるが、法は一つ。見る方面は多くあつても歸する所は一つの源泉、一つの目的。

二元或は多元は思想の中から追ひ拂はるべき運命を持つて、何れの科學もその範圍て統一の說明を求め、それ等が又終に一つに歸す

べきである。事物の說明といふのは總ての發現をその根本で云ひ換へやうとする事、色々の變化を一理で言ひ表はすやうにする事。思想は此の統一歸一を追はなければ止まず、科學の成功は統一の成就にある。

二元や多元の考へは科學の敵で、又文明や哲學や宗敎の敵。吾々は一足飛びに此の統一を明かにし得ないにしても、どこまでも宇宙は永遠に法爾に一つで、歸一である事を目的として進むを要する。統一は即ち美、歸一は即ち智慧。此の理を心から離さない樣にすれば、吾々は天然を沈思觀察してその美を崇め、その法を敬ひ、その最終の根底に橫はつてをる愛と智慧と力とを信じ得る。

土砂の一塊から地球太陽に行つても物は同じく、此の世界でスペクトラムに映ずるナトリウムの黃光は星の世界から來ても同じて、その源も一つ、その現象も一つ。生命の現象は顯微鏡下で見れば、人

間も虫も、植物も動物も同じ法で活き、そこに同じ智慧と力とが現はれてをる。

觀念を本にした進化として見れば、總ての偉大な神聖な美はしい又眞なものは皆一つの系統に入る。その上又見え觸れる物質世界以上に心の世界があり、現世以上に心靈の世界があつて、それ等が皆一續きの進化となり、物理の方でも道德の方でも總ての進化はこの統一の神靈が外に表はれ內に働くに外ならぬ。この進化の途上にある萬物が各その上の理想を慕ひ、その下の生存に同情し、同心となつて神に事へる處には、この統一は單に法とか道とか理とかの統一てなくて、意識的に愛の統一となる。

萬物の統一は又何れの宗敎でも一致の點で、無限の時に無窮の變化を呈してをる萬物が法に統一せられ、又その法は唯一の智慧から出てをると見れば、その見方は進で此の智慧を愛し之を親しく接し

やうとする宗教にならざるを得ない。即ちこの統一は美の精で、美は萬物の中に含蓄せられて、萬有に普遍して之れを内から作り出す萬有本來の精神である。

今の科學は、不幸にも物の中に本來に存する統一を見ないで、それを只外形表面の上からのみ見る故、その結果、統一といひ又は神といつても不可知のX、單に抽象した一致になつて、科學者の間に多くの不可知論者を生じた。我々は之に反して、一方では神が萬物の上に立つ支配者で天然の立法者であると同時に、又その中に、その中から力を表はして萬物を活かす生命の力である事を見る。即ち神は一切を包括するが、又一つ〳〵の物や、一つ〳〵の思ひの中にもその活力を發現し得る故、神は死んだ法則や、專制の君主でなしに、吾々の中に活きてをる愛の人格である。

生命の統一といふ事は、それと共に複雜といふ事を含蓄して、高等

の生命はその統一の中に變化複雜を多く持つてをる。總て生物の組織を見れば此の理は自明で、萬有は此の樣な複雜の統一であるから、從て神も抽象の統一でなく、生命の進化の中に見える統一の人格である。

神が萬有の中に入つてその生命になつてをる事は、太陽とその光線とに比べ得る。君が話された華嚴佛教は或は此の考へかと思ふが、太陽は一つであつても、その光のある處には、大氣の反射にも月の碧光にも、木の葉の青色の中にも太陽は存在する。又その光のあたる處には、人の眼でも、木の花でも、光明の生命を與へ、海波の瀲灩にも、泥澤の水面にもその姿は見える。見えても分かれても太陽は依然として一つで、その光は青く映じても赤く見えても、同じ太陽の光である。

それと同じく美の神は總ての生命の中に宿つて、動物や人間の身

體にも、社會の生活にも、文學の作品にも、又慈善事業の活動にも、總て愛の力で物を活かしてをる。この世界では神の生命の最も神に似てをるのは人間で、人間の心靈の中には、神の生命の發表である萬有を映ずる事も出來れば、又その中には、神の光を反映し得る。それ故此の神を愛すれば之の愛に應じて、生滅の人間の中にも不滅の光を宿どし、神を理想とすれば、益すその理想に向つて有限の生命の中でも無限の進歩に近く。

この理想は我々にとつては救ひの天使、慰籍の使者、進歩の預言者で、我々はこの天使に導かれ、この預言者に策勵せられて、恰も晨朝に日光のあたつて輝いてをる高峯を目當にして暗黑の谷を出て行く樣に、理想に進む。神は圓滿の美、圓滿の愛、圓萬の喜び。その無限の智慧と力を信ずれは、我々は此の地上の生活で必要なものは與へられ、義務を盡し、人を愛し、神を拜する至情はその中に發露して、此の世

から神の光を仰ぐ事が出來る。

神が萬物に宿るのは即ち創世の根本で、神が人間に化現するのは人間進歩の力。此の宿り、此の化現の進歩が即ち進化で、人の人格の中に神が現はれ、神が人に表はれる極、人は終に神となる。

生滅は萬有の實相であるが、その生滅は無意義の變遷でなく、進歩のための變化。その變化の中に永遠の實在が現はれ、又その生滅の根據には現象以上の力が宿つてをる。物質の元素が七十有餘ある中で、生物の身躰を作るのが十八。此の十八であらゆる生物の生命が營まれて、云はゞ十八絃の琴がこの生命の音樂を作るとすれば、宇宙の大合奏は如何に複雜に又雄大であらう。愛の根本の音が多くの音律、樂器に現はれて神樂を奏してをるとすれば、その音調の變化生滅は決して無意義でなからう。

世の中にはこの生滅を悲む人もある、又人生の多難を怨む人もあ

る。然しそこに變化無常、不圓滿、愛慾、死滅と見えるのは、その眞相に入れば永遠の勝利、愛、美、不滅である。神の進化の大業の一片一面を片時だけ見ても、決してその全躰、永遠の眞面目を見る事は出來ない。死を單に四大の解躰と見、滅を長夜の流轉と見るのは、進化の一片面で、死の爲めに物質の一分子も、心靈の一皷動も全く亡くなる事はなく、その變化の中に永遠の進化を進みつつある。神の愛は此の宇宙を運轉し、神の智慧はその嚮導となりその結果、吾々は神の美を示現せられ、神の美を心靈に享け樂み得る。

一時の生滅は永遠の進化から見ればその小波瀾である。總て進化には、變化と常住との二面の力が働いて、永遠の觀念が生滅の實質の中に表はれる。此の宇宙は無限の空間の一部で、又無限の時間の變化の一段で、先に滅した宇宙の要素は此の中に保存せられて、その變化が又進て行く將來の宇宙の元になる。生滅は畢竟卑いから高

く進む一段の變遷で、一微分の變化も皆神の力である。

小にしては細胞の微分子、電子の細、大にしては星界、星雲の大、小も無限、大も無限。それが一つになつて進化の協同生活を營む、その力と目的とは殆ど思慮の外にあらう。而してこの極大の中にも極微の中にも神が宿り、神が生きて居ると思へば、その智慧と愛との宏大な事、又微妙な事は、我々にとつて大きな策勵又慰藉である。而して此の神は遠く他方に居る神でなく、我々の中にも宿り、我々と親しく接して悲みにも力になり、喜びにも力となると思へば、此の關係は密接な人格の愛でなくて何といはう。此の愛は圓滿の愛。その爲めに生き、そのために死して光榮ある愛。又神から與へられたと同時に、神に受けらるべき愛である。

十六、父として見た神

今日は少し書けそう故、主としてキリストの敎について申し述べたい。

生命を單に宇宙の進行として見たゞけでは、宗敎の滿足は得られぬ。生命は社會的故、神靈がこの社會的生命の中心となつて、その上吾々にとつて愛すべく崇むべき相手、人格的の對手となつて始めて信仰に入り來る。この美はしい觀念はキリストが人類に與へたもので、キリストの信者にとつては、宇宙は單に生命とか理のみでなく、一つの人格に支配せられてをる。神の此の人格は即ち父である。宇宙は一つの大きな愛情で出來てをる家族で、神はその家長。家長である父はその子等を愛して、子等が同情を求め助けを求め、父の愛を希へば、父は之に應じて愛を與へる。子の心は父の心の中に安心

し、又その愛で生きる。それと同時に父は秩序の源泉で、家庭の法は皆父の心から出る。

キリストの一生を見ると、この父に對する孝、即ち愛と義務とで生きて、その爲めに身を犧牲にしたので、その眼には一切萬有は此の父に作られ、父の爲めに存在する。即ち猶太人が王或は判官とした力の神は、キリストには父の神となり、神と人との約束は愛情に轉じたのである。我々はキリストの一生の實行に啓發せられ導かれて、子の情で父に對し、終に成人として父と合一するを目的とする。單に父に愛せられ、父を愛してをつた稚兒は、父の愛を基にして父の愛を自身に得、父の目的に參與し、父の美を事實に現はすに至る、茲に美の宗敎がある。即ち單に父とし子となるのから進て父の伴侶とならなければならぬ。

美の宗敎は子として父に對する愛情を十分に自覺的に發表して

神靈に入り、神と共に愛の中に合する。キリストの敎は、敎會で敎へる如く父を崇めるばかりてなく、キリストの云つた如く、父の完き如く自らも完くなるに至らなければならぬ。神の如くなる事、即ち父の愛を自分に活現して、それで自らの中に神を表はす、茲に美の宗敎がある。それ故神を崇めるに儀式は外形で、要は心の渴仰、心と心との愛である。

神が我々の父であるのは、創世の時だけの事實でなく、現在にはその父の宿りを得、未來には進化の理想となる。常識から見ても、我々の意識や又意識の中に入つて來る萬有に、一つの根底、一つの理想がある事を要し、この根底又理想は即ち三世に亘つて變りのない父である。

神を父とすれば、人は又皆兄弟である。兄弟て心の根底が同じければこそ、我々人間は集つて社會を組織もし、又人類全體が互に同情

し得る。家庭でも社會でも國家でも、乃至は人類全體でも苟も何かの同情、交通のある處には兄弟の愛がその本になつてをる。封建の割據や、商工の競爭は兄弟の範圍を小くしたが、それ等を撤去して我々は宇宙同胞の社會に進みつつある。世界に戰爭の絕える時は來ないとしても、今の國家は封建の割據排擠の風を脫して出來、その國家の間にも幾分かは道德的關係が增進してをり、特に國家としての關係の外に、その人民の間の感情交際は國際の關係に有力の融和劑となりつつあるのは、人類同胞の一端てないか。政略や兵略の目的で出來た國際同盟でも、單に政略だけで同盟は出來ず、人民の同情理解が必要となつてをる。商工業の競爭は止まないとしても、その以外に學術や文學や宗敎の精神上の交通て、國家の境界を超えた世界的社會が出來、その勢力は益す加はりつつある。此等の進步を基礎にして、神を父とする人類相互の友愛てそれを鞏固にして行くのは、

今後文明の進路である。萬人の父が眞に父とせらるる日を來らすのが我々愛の神の子の識務であらう。

凡そ人の信仰は人の性格に支配せられるが、又その信ずる所の神の性質が人の性格を左右し感化する事も甚だ大きい。神を專制の王とした國民には專制の氣風が增し、法律の守護者判官とする敎は正義の觀念を盛にする。今迄世界の宗敎は色々の方面から神を見て、或は醫者、或は福神、或は王、判官、司祭などに見たが、キリストに至つて始めて人の衷情に訴へ得る父の愛を宣示した。神を親とする宗敎は極めて質朴で淸淨であると同時に、眞摯で高潔な美はしい信仰である。然し單に親と見ても、その親の愛に親しく接せず、その美を渴仰する熱情がなくば、又親といふ人間の肉體的聯想を去つて心靈の粹に入らねば、その內容が十分に表はれ、親子の實が擧がつたとは云へない。親の愛は人生の美に現はれ、親の慈悲は宇宙の進化て事

實になるのを見て、その美を仰ぎ、その慈悲に攝取せられ、己れの心を神の中に置き、神の心を己れの胸に感じて、始めて神を親としたといひ得る。人の心は圓滿に發達して居ないが、神はその中に宿つて、終には十分に開發する。二つの心は元一つで、その一つなのを人間が體得し活現すれば、そこに二つの親密が事實となり、親と子とは永遠の伴侶として愛の中に相喜び相合する。

親は子を生むだけでなく、子を愛する。愛するが盲目の愛でなく、强い力と美はしい智慧とで愛する。この親、美の神に接するのは、心と心との直接の交際である。今迄の一方片面の神の見方は、皆この信仰の中に沒して、此に最後の統一、圓滿の成就を得る。

十七、美の神の信仰、人生の理想

健康の狀態はどうかと問ふていたゞいて有りがたう。少しよかつたのも永くは續かず、今は先にお話しした事を反復する外ない、即ち此の世を去るのも遠くはなからう、いつ他世界に入るか分からぬ有樣である。然しこの薄弱な身躰を捨てる事は、云はゞ一つの救ひ、てあらうと考へる。自分は死を喜んで迎へる。然し萬事の終局として死を見るのでなく、死は尙一段高い大きい世界に生まれる始めと思ふ。その世界では理想が十分に得られ、この世で斷片的に見てをつた光明はそこで十分に見られる。此の生はその高い生命の豫備と信ずる。

それ故死を嫌ふ理由は自分には少しも發見せられない。死の爲めに一層高い目的、一段光明ある理想に入る希望と喜びとがその賜

と考へる。その美はしい豐かな生命に入るのも遠くはなからう。

神に對してつまらぬ疑念を抱くは愚で、神は我々を愛する美はしい萬物の源である。神と我々とは單に父子といふよりも一層高大な愛の關係で結び附けられてをるので、神に對する愛は心の最高最强の愛である。その神に會ひに行く新生命の人々に何の恐れがあるか。新婦が愛情の濃かさを十分に知つてをる新婚に結婚する場合に何の畏怖があらう。新婦がその理想の夫と永久に同接する爲めに、その愛情を眞の伴侶としてたの生活に表はし、眞に心を一つにして目的理想を共に行ひ、喜憂を共にする爲め新婚に會ふ場合に畏れる事は少しもないと同じ樣に、我々は眞の愛で理想の神に合する門出の死を喜て迎ふべきであらう。

この世も美はしい、然し彼の世の久遠寂靜の光りに近づくに從て、美は增し、愛は强くなるに違ひない。それ故時計の砂が一粒づゝ滴

るに從て、自分は此の光に一段々々近づくのを考へて、眼前に神を見る樣に思ふ。その神に近く時には、奴隷が暴主の前に跪くのてなく、喜びに溢れて無限無比の愛に自分を投じやう。一旦その光に接したものは此の身躰の生活の中にも神を渴仰して止まないが、それが一層自由に精神心靈の純潔の愛に入り得るならば、神の力は我々を引接して衷心からの誠と愛とで我々をその神靈の中に融化してしまうであらう。同じく愛とはいふが此の世の愛と神の愛とはどれほど違はうか。

神の子キリストを信じて、その信に愛を得て、すら、我々の生命を一新するとすれば、超世靈異の光榮と圓滿具足の美との神を現前に見る喜びは云ふまでもなく、又その神に入る路に上る死の一瞬の希望は何に譬へ得やう。反復して言ひたい、死は人の心靈をその自由の故郷に導く天使である。それ故、此の喜ばしい希望を前途に望むて、

信仰、依信、安心の情を抱き、又喜ばしい中にも忍耐し、眞摯に仕事をして、此の一生を美はしくしなければならぬ。此の世の生活に此の美はしい一生を過ごせば、我々は眞に天國に入つて得べき超世の美を準備したので、その終の死を喜んで迎へ得る。「未如何になるかは未だ現はれず、されどその時は我等神に肖ん事を知る」。未來は十分には知れないとしても、神に信頼して、その愛の中に又その愛の旨を奉じて此の生を送れば、確に理想に到り得て神に肖るといふ希望て未來に向ふ事が出來る。實在の眞實の美は我々の想像の及ぶ處てないとしても、而かも我々の憐れな想像に上るだけても、その喜びは言語に絶する。

君は僕に他の同國人と同じ樣にルーテル派の敎會に屬するかと問はれたが、確にそうてある。然し名はルーテル派の會員てあつても、又ルーテルを尊敬をもするが、自分の信仰はルーテルの押し立て

た如く神の意志に服從する信仰に神の恩寵が來るのでなく、神の美を愛してそれに引接せられる、そこに恩寵があると信ずる。

信仰は愛の結果に外ならぬ。人に對して十分の愛があれば、その結果その人を信頼する、即ち信仰がある。譬へて云へば、愛は葡萄樹で信はその枝。此の樹には根を養ふ土壤があるが如く、愛と信との根は美で、神はその土壤。自分は信ずる、將來人の信仰は益す此方に進で、美を崇拜し、之を愛する故、從て又之を渴仰し又之に肖やうとする。人類の進歩は心靈の方面で益す成熟して、愛の中心人格である神に對して美はしい觀念を養ひ、その觀念が人の心に充ち、人はそれに從て動く樣になれば、此の美に對する信は單に崇拜といふに止まらず、心を圓滿の境、清淨の喜び、新しい幸福の源に引き上げて、人生に強いインスピレーションを與へ、人生を復活するに至らう。そこになれば、最も賤むべき者の中にも高潔で美はしい何者かがその中に

潜むでをる事を知り、何れの人にも神の美の光りが終には光耀し得べきものとして、その人を重んずるであらう。此の考へがあれば、自分でも又他人をも、身心共に美を開發させやうといふ熱情が出來、神自らが萬物を美にする如くに、人類の中に愛と美とを傳播し得やう。この神の誡は單に禁誡でなくて、下の如くであらう。「汝等は余が美なる如く身體心靈共に美はしかるべし、而して此の美によりて余を愛せよ。」

君は聖書の中にも此の美の宗教の根據があるかと問はれた。それに對して舊約の中に三つの文章を擧げて答へたい。新約全體は此の三つに基いて出來た美の福音である。只我々はどこまでも法律の形式的の考へを捨て、此の喜びの福音を曇らす外皮を去つて、神がその愛と美とを現した福音の眞意を捕へなければならぬ。

第一に創世記の始を見られよ。「神その造りたる諸の物を視たま

ひけるに、甚だ美はしかりき」。此處に一切萬有――我々の目に見えるも見えないのも――の美、一切萬有が各その處を得、各その美を發揮して調和の美を成し、神の美を永遠に現はす象は見らるる。我々人類の心は十分にその變化と調和と、又その偉大な目的を見得ないにしても、碧空の穹窿に遍滿した光り、空飛ぶ鳥、水に棲む魚、草木の生命から進て心靈の美に至るまて、皆各々神の美の一面を反映して、相映じ相照らす大きな美は幾分か之を悟り得る。

啻に神に造られた萬物が美てあるのみてなく、その源てある神自らは如何に美はしいか。詩篇(二十七の四)の作者はいつた「我れエホバの美はしきを仰ぎ、その宮を見んが爲めに、我が世にあらん限りはエホバの家に住まん事を願ふ」。美の神の美はしい宮居、それが萬物の美の因て出る源、又終に歸着する理想て、萬物の美はその土臺を作るに外ならぬ。天地山川、草木、心靈、何物の美も皆神の美を印して、その美

を開發し、又その美に歸入する。此の見える世界でもその樣であれば、我々の心靈で見得る世界、又今は心靈にも映じない超世の美はどの樣にあらう。

次に我々人間に關して、詩篇は、又人類に美の神を精神として、その中に幸福を得、人の事を果す樣に敎へていつた。「汝の御業(みわざ)を汝の僕(しもべ)に、汝の光榮をその子等に顯はし給へ。かくて我等の神エホバの美はしさを我等の上に臨ましめ、我等の手の業を我等の上に確かならしめ給へ」。言を換へて云へば、我々は神の美はしく又愛すべき性格を我々に得て、その信の中に生活の何れの方面にも愛と美とを開發すべきてある。

我々はキリストの信者として、キリストの中に現はれた高潔の理想、高潔の美を神の美として仰ぎ得る。然し此のキリストに對する信も要するに、天の父の完きが如く完からん爲め、キリストが天の父

と一つてある如く、我等も亦神に一つになり、神の中て我々互に一つにならん爲めてある。キリストが父に對して云つた如く、「汝の我れを愛する愛彼等(即ち我々)にあり、又我れ彼等に在らんが爲め」てある。

一切の德、圓滿の美を具へて、强い力と優れた智慧とて我々を引接する神を愛して、キリスト始め神の子てある人が皆その中に一つの愛の中に住まひ得る。此以上に眞の愛の王國があらうか。

十八、美なる神

今迄述べたのは神を萬有に含蓄せられた力として、その色々の方面て或は生命とし、或は王、又は判官、父など、見られるといふにある。そこて進て美の實在として神を見ると、神の美は實在てもあり理想てもあつて、一切の美の圓滿充實がその本體てある。神を美の實在調和と進化との源泉又歸着と見れば、他の方面は盡くその中に納まり、又それらの色々の見方よりも我々に直接になつて、愛の關係が深く、從てその眞相は十分に現はれる。

それ故我々の考ふべきのは、第一に宇宙はこの含蓄美の現はれてある事と次には此の美の實在自らが大きな藝術家てある事。神といふ大藝術家はその超世の性から宇宙を藝術の作品として作り出し、その作品の中に進化の程度に應じて調和、雄大の美をあらゆる方

面に現はす。即ち宇宙の美は神の生命が天地に現はれたものである。

美を根本にして見ると宇宙は道德と知と美との三方面があつて、道德も知も美即ち調和の實現て完美になる。美は我々の中にも、周圍にも又超世的にも存在するが、それが此世て藝術的に現はれて人心と交渉する。

藝術といふのは天然と生命との美、即ち思想や、感情や理想の美を、言語、形色、音律などで現はすので、之を心靈の方から云へば、人の性格から出る優雅の行や信心や勇氣や獻身の事實に現はれる。藝術は現實を解釋し、現實の中に理想を發見し、從て現實を超越して、それに新生面を發揮して道德や社會の事實を美て一括する。

藝術はそれ故に人間の心靈が欣求した事又成就した事の記錄て、人心教化の大機能を具えてをる。美を愛するは先づ天然の美に出

て、それから心靈の美に進む。それ故心靈の藝術家は自分の心に神の美を映しとり、又此の力で他人を感化する。

美は何物の中にも何處にもある。然し美が見える樣になるのは我々の心眼が之を見やうとしてその力を集中する爲めて、若し自分自身に元來美の實が存せず、又外の美に應じて感動するのてなくば、世界中を遊〻しても美は發見出來ない。ポーロの所謂る「道は近く汝にあり、汝の心にあり」といつたのもこゝのことて、云はゞ美は半ばこちらの眼に實在してをるので、それ現はれは心靈の內を萬物の外と相應ずる處に在る。

美の精神は天然萬物に遍流して、物に從ひ時に應じて我々の觀取に委せる。その精神を萬物の中に觀取すれば、則ち宇宙の內部の心靈が見える。その內部の心靈といふのは即ち神の超世的人格て、超世の心靈が現世に現はれて美となる。神が遠く高く天上に在すと

いふ如きは神に接しない貧弱の想像で神は我々自身の美を愛するその愛の中に存在し活きてゐる。

美を觀じ美を樂むのは人心を潔め高める所以で、樂みの最も強く又弘いもの、愛の熱情の根本。天然の美を靜觀するのは即神の藝術を尊信する所以。それ故、人が藝術の創作に從事するのは神といふ藝術家の足跡を履むで、その藝術的作品である宇宙人生至る所にその藝術の光榮を宣揚發揮して、他のまだ之に氣附かない人に示すのである。神の作品の天然にある形、光や音律、人間の思想や行動運命がその內面の生命に含蓄せられた美は、之を觀取する人の心眼に映じて、それで得た美が形や言葉の作品となる。

萬有の中の美はつまり神の愛と力と智慧との現はれで、美はしい思想は實に美はしい生活の源泉。それ故我々の思想は天然の美に觸れて感動し、又我々自らが神の愛を躰して、柔和の心、離脫の態度で

人に接すれば、人と人との間にも美の感應で共に神の美の中に生活する。美はしい生活といふのは、己れの四圍の美と調和し、己れの美で人を感化するにある。

美なる神を愛するのは永遠の生命の始めて、歸敬は心靈の發表する最も純潔の愛、而して永遠の生命は美の生命。歸敬の心を以て神に對すれば、愛情の力で益々高く、美の大碧空に上つて、最高の美に向ふ樣になる。

美といつても一種ではないが、美は人の心を潔くし、高めて、野卑な快樂を捨てゝ高きに就かしむる。

藝術家は美を求めて、之を作品に現はし思想感情をも形や言葉で美はしう現はして神に導く嚮導をする。藝術家の眼で見れば、世界は死んだ機械でなく、美と圓滿との宏大遍滿の生命に充たされてゐる實在であつて、之を人の意識に明かに示すがその職分である。

美の第一の要素である調和は萬有の中で音にも形にも色にも遍滿して、その音の調和は音樂になる。その他の美術は措いても、音樂は特に整齊と應和諧調の藝術で、特にその合奏には雜多の分子を集めて調和の美を成就する特長を具えてをる。

形色音律以上に進て心の美になれば、心そのものが美になるので、單に心が美の形式を具へるのでなく、有限の生命が無限との感應に充たされるのである。即ち心が此の世にも現はれる眞善美を靜觀して、心自らが美の碧空に上り、その光明に同化する。

即ち美は形色音律の外面から智慧の靜觀三昧に進み、最後に高潔な性格の心靈美に入る。美又は理想を求めるのは此の心靈の最高に進む元で、美は決して形色の外形で終り、又は靜觀沈思に止まるものでなく、努力德行の源泉である（後章藝術と活動的生活參照）。人の生活は何れの方面でも現實だけに活きるのでなく、生滅の世相以上更に理想を求

め、その美に對する情熱で進歩の力を與へられる。理想に對する渴仰、理想に進む精進は人生の力で、我々がこの理想を知る以上は十分自分で又自分の中にその理想を實にしなければ止まない進化を求めしめる。而してその目的は神の美に入るにある。

此の理想精進は又人生が生死の一生でなく、死が萬事の終でない事の證明であつて、肉躰死の爲めには散じても、性格の美、心靈が宇宙の美と感應して進む進化は永續する。今までも此の生でも美を渴仰し理想に向て進むで失望しなかつた我々は、將來についても少しも憂ふるを要しない。我々の前には死が迫りつゝあるに違ひない。然し肉躰の死は滅亡でなく、却て眞の不死に入る門戸、眞の我の開展する一段で、心靈の擴張は茲に一層の自由を得る。苟も理想に對する熱情があれば神に對する愛があれば、そこに不滅の保證がある。此世の生と彼岸の生との間には死の河が隔てをしてをる樣でも、そ

の河には理想の橋がかゝてをる。

死後の事は今現前しないでも、進化の續きとして、今現にある善美なるものゝ開展である事は疑なく、何れの人も自分の本來の光を見るに至るべき必然の性と運命とを持つてをる。

無比の美、圓滿の平和の國は我々を引接する。そこには神が愛と美とに生命の大祕奥を示現し、そこには一人の慶喜が卽ち直に萬人の慶喜と融合する。

十九、一切の美を完成する境界、

不滅に關する考へ

感情の方から人は自分の不滅を希ふ。此の感情は深い根から出てをつて、何人でも總ての物がその依て出る根底の見えぬ世界に何かの關係を持つと思はない事はなからう。我々の心の中には何か現實以上の實在に憧れる情がある。細かな愛情には底の底に聲があり、美を慕ふては現實ばかりでない美を見、嚴峻高潔なものに對しては敬服嘆慕の神聖の熱情が發するなど、物には深遠の奥があるを思はしめる事は多い。此の宇宙の中に現世の事相にも思ひ至らぬ微妙の關係があるをの見ても、人の不圓滿の現實の生活がそれきりで終らうとは思へない。圓滿を渴仰し、美や調和を求め、不盡、無限、神聖の理想を追求するなどの性情は、つまり人には不滅の生命があり、

之を求める性を與へられてをる事を示しはしないか。今の心は一層高い心靈に入る豫備であるかの如き感じがあり、又心には段々高大の力が現はれて、今迄には思ひも附かぬ事が段々に現はれるなど の事實を考へると、此の世の短い一生で作り上げたものが進て美と圓滿とに向はねばならぬらしい。

不滅といふは心靈の永續の義で、科學では勢力の一分も物質の一微も滅亡しないと敎へるが、我々の心靈が得たもの、爲した事が滅に歸しやうとは考へられない。我々の不完全な心にも、神の御姿は映じてその不滅の美を示す。さすれば神の子、神の相續者が眞に神の光榮を表はし得る不滅の生命の中には如何なる喜びと內容とがあらうか。その面影は此の世の愛にさへ映つてをるではないか。

不滅といふのは心靈が人類の歷史の中に沒し、又は人の記憶に殘つてをるといふだけでなく、又無意識の混沌に歸入するのでなく、人

格の生命が肉躰の死以上に續いて高く圓滿に進むで、此世のみならず超世の生命を有する事。此の不滅がなくば心靈の進化もなからう。

死んだ人も或る意味では尙此の世界に活きてをつて、人類の中に働いてをる。我々の心靈が呼吸する空氣、我々の語る言葉、考へる思想、傳へて來た傳承又道德の規矩になつてをる標準、此等は皆我々の祖先の心靈が作つたもの。人間が及ぼす勢力は、現在だけでなく、善につけ惡につけその力は肉躰以上に殘る。墓が決して人間の最終の場所でない。

春の霞、秋の露、物には皆生滅があるが、而かもその風情は不滅。さすればその風情の美を觀る人間の心靈は又永續するに違ひない。肉躰の生命は發達して又衰へるが、その死が直に心靈の死でなく、却て無限の進步に入る路で、不滅といふのは即ち常住の進步である。

此の確信があれば我々の心靈は無限の世界、無限の美をその舞臺にして、此世の美から段々に高い美に進み、進むに從て實相に近づき、近づくに從つて熱情と喜びとを增す。苟も圓滿に進むを望むなら不滅の信仰がなくてはならぬ。此の信仰あつて始めて死を見る歸るが如しといひ得る。我々の心には無限が含蓄せられて、眞の我は神靈である。

何物も死を免れる事はなく、何處にも死の弔鐘は鳴る。草の葉の綠も枯れる、花は麗しいがそれも萎む。蝶は日光に舞ふてをるが、秋の夕には死ぬる。空にある一つの塵も曾ては生物の身躰の一部であつた如く、又一つの巖石が今の姿をして立つてをる迄にその爲めに幾何の生命を取つたか。此う考へると死は忌まはしい樣であるが、死は決して生命の反對でなく、生命の一段で、死の夕を送つては新い生命の朝を迎へる。一分子の物質でも一處に散じては他處に現

はれ、こちらに消えた水の蒸氣はあちらで雨となる。今の科學から云へば、物質にも死滅はない。況して人間は神の命が活き、その心には神の姿が表はれて、その生活は常に神の光榮の爲めに、又神の美の爲めに存して、不斷に心靈の奥に潛むでをる力を開發する。進化の妙法は即ち不滅の福音である。

神は一切の調和の根底に活きてをる活力、一切の法を出す意力。此の神を信じてその中に不滅の希望を繫ぐ事が出來るならば、その希望の中からは勇氣も忍耐も精進も出、如何なる理想も達し得られないといふ事はない。

人は何處から來て何處に去るとは能く出る問題であるが、進化の究竟は、一切が一つになり、一つが一切となるにある。即ち人の人格が神に沒するのでもなく、神が個人に分れてしまうのでなく、神がその心を個人の中に現はし、個人が神の本元を意識し躰得して、その間

に愛情の感應融合が自由となるにある。神の美を實に得た人が即ち神の中に入つたので、その美の中に神自らが示現する。

人は神を我の衷心に發見し、神は人々の中に自らの姿を見る。子は父の面影で、父は子の中に自分自らを見て喜ぶ。その父子の愛が永遠の美の調和として、心靈の融合として融通進化する、そこに美の神の圓滿はある。此の樣な愛と喜びとを圓滿にした不滅境が即ち天國。それ故今我々の意識は貧少であつても、その思慮に上らない程の未來を觀じて大に喜び大に進むべきである。

總て進化は前の狀態を捨てゝ進むのでもなく、又單に前の狀態を加へて出來るのでなく、下から上へ、上から又一層上に先きの美を集めてそれを圓滿に成就しつゝ、一層圓滿の境に進むのである。生命は即ちこの發達の路筋で、その中には常に過ぎて來た狀態の心髓を不滅に含蓄して開發する。それ故、進化といつても不滅がなければ、

變遷に外ならぬ、進化は即ち不滅の保證である。

今の我々の心にある寶は祖先の生命の貯藏場又鑄冶の爐で、我々の生命は又同じく不滅に發達して行く。祖先の人格は彼等自らの中心統一を保ちつゝ、又我々の人格の中にも入つてをる。人格は美と調和との產物である故、決して彼である故此に入れないといふ樣な窮屈なものでない、融合調和して而かもその不滅の進化を遂げるのが即ち人格の不滅。入る日の光は滅しても、復明日現はれ、その光と熱とが一切生物を生かして此の地上にも浮動してをると共に、日は依然として日たるを改めない。今日此處に光りを放つてをる石炭の火は、幾千萬年かの古に、この地上の植物を活かした太陽の光りではないか。吾々が今語りつつある言語、觀念の中には萬世以來の祖先の心が籠もつてをるではないか。

二十、信仰の勝利

「神は父」との福音は人生の大安慰であるが、此の父を美の神として、近く心の裏で之に接し之を愛し得る我等は如何に幸てあるか。人類の活動の中にも神の美は現はれ、小な我々の胸にもその愛は鼓動して、我々は生死を超えて此の神に近く。宇宙は此の神靈の現はれて、我々の心靈はその一波動、而してその波動の交叉し差參相反映調和する美に人生の進歩がある。人類の歴史は畢竟神の愛と人の信との大活劇である。

此の世の苦惱に疲れて生を厭ふ人もあらうが、我々はどうしても生命を脱する事は出來ない。我々の個人の身躰があつて生命があるのでなく、生命の活きた流が遍流して、その泡沫が身躰と結ばれてをるのである。泡沫はなくする事が出來るとしても、又如何に之を

厭離する事が出來ても、その根である生命の流れは決して絶えない。この絶えない不滅の生命の中に、無限の進歩があり、理想の力があつて、希望と喜びとで我々を導いてをる。

或る詩人がいつた。

有情の命、終りに近しと嘆くや、君。
死は生に移る一時の中有のみ。
汝が胎内にありし間は死に同じからざりしや、
天地の寂靜にも似て、感じも呼吸もなくて。

さなり、汝は死なん。されど此の宏大の力、
汝の生命を造りし力は永へに活きん。
此の力は又無數の星を進行して變らぬ力、
此の力は又濱の砂子にその生命を與ふる力。

靜かにして喜べ、汝の眞の同胞は、
火にも嵐にも、又露の玉を浴はす花にもあり。
汝が不滅の生を悅び樂め、
無限の世界の心はこの生と一つぞ。

形や質は變化をしても生命そのものは消滅しない。物質の極微でも、又人の心でも解散して死んでも、それは滅てなく、力が他の形に移つて、宇宙の生命の他の方面に現はれるのてある。心靈から出だ勢力や、道德の感化や、又理想や、人と人との感應はその中の一人々々の生死て滅しないて、一つの人格の力は飽くまて心靈の生命の中に、即ち神の國の住民として永續し進化する。ジョージ・エリオットが此等の人の力が「人々の心の中に感化の勢力として生き、宇宙の大音樂の中に響き亘る」のをいつたのも、又カンベルが吾々が跡に活き殘つた

人の心の中て生きて「不滅てある事をいつたも此れ。

然し此の不滅は先にも云つた如く、單に人を感化した勢力として、又人の記憶に殘るとしての不滅だけてはなく、我々の心が發表した思想や感情や又それから出る德行は、集合だけてなく統一のある人格の力てあるから、それ等の感化は皆人格の勢力として存し、その人格は即ち宇宙の調和の中にその統一を維持し又發達しつつ不滅の生命を有するのてある。人格の勢力は融合て自他相感應して、その感化は他の人の中にも生存するが、この融合の爲めに無差別に沒し去るのてはない。

我々の人格は此の樣にして不滅の生命を持續して、益々進て神の愛の中に入る。愛は人格の對立と同時に融合て出來、美の調和は無差別てなく、各統一を有してをる人格の調和てある。此の見方から云へば、感化や記憶が不滅の根據であるのてなくて、人格の不滅があ

るから感化や記憶の不滅がその結果としてあるのである。

我々の信仰から云へば、贖罪といふのはキリストが神の怒を鎮める爲めに、宥めの犧牲となり、人の罪惡を贖ふ贖ひ代を拂つたのでなく、人が各々の本來の我の神に歸つて、神の光榮を現はす爲め、神の愛を實にする爲めに、下劣の我れを棄て、進化の卑い程度を棄てて高きに進むにある。即ち神の愛の中に身を投じて、自分を自分のものとする考へを犧牲にして、神に同化して、進化の美をなすのが、美の宗教の贖罪。罪といひ墮落といふ卑い肉躰の喜びや幸福を、高潔の調和の犧牲にして神の心とする實を行ふにある。贖罪は宇宙の大調和に歩を進めて、神と人との愛を圓滿にすべきもので、神の怒りを畏れての贖ではない。

今病床でバーンズの詩を讀むでをるがその中の一句は此の義を云つてをると思ふ。

Who made the heart, 'tis He alone
Decidedly can try us.
He knows each cord, its various tone,
Each spring, its various bias;
Then at the balance let's be mute,
We never can adjust it;
What's done we partly may compute,
But know not what's resisted.

人間には卑い性に從ふ傾向もある故之を罪と見、又罪として忌避すべきではあるが、徒に罪を惡み、又罪人を罪するのが道德の能事でない。社會がその安寧秩序の爲めに罪を罰するのも、罰して苦め懲らすが目的でなく、その正義で罪人を警醒して、神に對し、人に對する愛情に返らしめるにある。即ち罰は調和の回復である。

罪に對しても愛が第一の要件で、惡を惡むで善に移らしめる誠意がなくば、罰は何の詮もない。キリストが姦淫の婦人に就いて「非なきもの先づかれを打つべし」といつたその心持ちは總て惡に對する態度の最も肝要な覺悟である。此の心持ちで惡を惡めばその憎みは即ち愛で（復活の暗光三頁參照）神の愛を身に躰して行へば、その愛の中に天國は心靈にも社會にも現はれる。神の愛は太陽の光りの樣に四邊に映じて、之を映ずるものに皆その光を發せしめる。宇宙の狀態は變化しても、その愛の生命に變化はない。恰も映ずる物象が違ふに從て色も光りも違ふ樣でも、その實光りは不變であるに似てをる。

愛は永遠の生命、宇宙の大法、人生は愛の進化の舞臺。

それ故我々は光明ある不滅の生命を望んで、常に進み、日に新な心靈の中に不滅の美を實にすべきである。

信仰の勝利

美の宗教から見た佛教

一